

506  
216

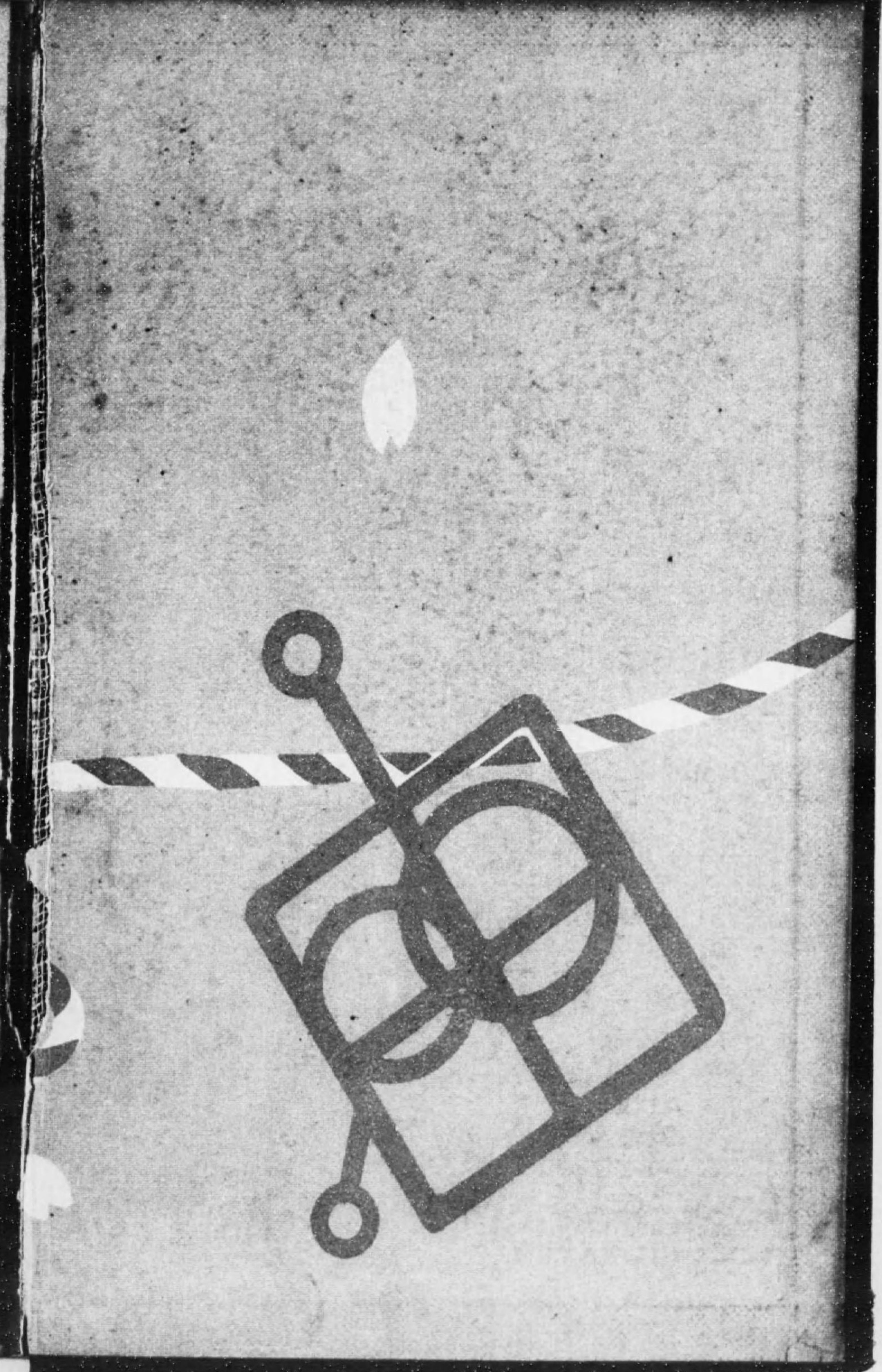


0<sup>1m</sup> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>16m</sup> 50 1 2 3 4 5

始









506-216

# 君に捧げて

|    |    |    |    |      |
|----|----|----|----|------|
| 軍  | 陸軍 | 海軍 | 海軍 | 元帥   |
| 少將 | 中將 | 大將 | 大將 | 陸軍大將 |
| 男爵 | 男爵 | 男爵 | 男爵 | 男爵   |
| 育  | 名和 | 宮岡 | 八代 | 上原   |
| 會  | 長憲 | 直記 | 六郎 | 勇作   |
| 編  | 閣下 | 閣下 | 閣下 | 閣下   |
|    | 共述 | 題字 | 題字 | 題字   |

東京軍事教育會

大正  
11. 9. 1  
内交



傳千古

之原勇作



不死

代宗 亡而



勅諭

我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所に在る昔神武天皇  
躬つから大伴物部の兵ともを率ゐ中國のまつろはぬ者とも  
を討ち平け給ひ高御座に即かせられて天下しろしめし給ひし  
より二千五百有餘年を経ぬ此間世の様の移り換るに隨ひて兵  
制沿革も亦屢なりき古は天皇躬つから軍隊を率ゐ給ふ御制  
にて時ありては皇后皇太子代らせ給ふ事もありつれと大凡兵



権を臣下に委ね給ふことはなかりき中世に至りて文武の制度  
皆異國風に倣はせ給ひ六衛府を置き左右馬寮を建て防人など  
設けられしかは兵制は整ひたれとも打續ける昇平に狙れて朝  
廷の政務も漸文弱に流れければ兵農おのつから二に分れ古の  
徴兵はいつとなく壯兵の姿に變り遂に武士となり兵馬の權は  
一向に其武士どもの棟梁たる者に歸し世の亂と共に政治の大  
權も亦其手に落ち凡七百年の間武家の政治とはなりぬ世の様  
の移り換りて斯なれるは人力もて挽回すへきにあらずとはい

ひなから且は我國體に戻り且は我祖宗の御制に背き奉り淺  
間しき次第なりき降りて弘化嘉永の頃より徳川の幕府其政  
衰へ剩外國の事とも起りて其侮をも受けぬへき勢に迫り  
ければ朕の皇祖仁孝天皇皇考孝明天皇いたく宸襟を惱  
し給ひしこそ忝くも又惶けれ然るに朕幼くして天津日嗣  
を受けし初征夷大將軍其政權を返上し大名小名其版籍を奉  
還し年を経すして海内一統の世となり古の制度に復しぬ是文  
武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歴世の祖宗専ら蒼



生を憐み給ひし御遺澤なりといへとも併我臣民の其心に順  
逆の理を辨へ大義の重きを知れるか故にこそあれされは此  
時に於て兵制を改め我國の光を輝さむと思ひ此十五年か程に  
陸海軍の制を今の様に建定めぬ夫兵馬の大權は朕が統ふる  
所なれば其司々をこそ臣下には任すなれ其大綱は朕親之を  
攬り肯て臣下に委ぬへきものにあらす子々孫々に至るまで篤  
く斯旨を傳へ天子は文武の大權を掌握するの義を存して再  
中世以降の如き失體なからむことを望むなり朕は汝等軍人の

大元帥なるをされは朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を元首と  
仰きてそ其親は特に深かるへき朕が國家を保護して上天の  
恵に應し祖宗の恩に報いまるる事を得るも得ざるも汝等  
軍人が其職を盡すと盡さざるとに由るをかし我國の稜威振は  
さることあらは汝等能く朕と其憂を共にせよ我武維揚りて其  
榮を耀さは朕汝等と其譽を偕にすへし汝等皆其職を守り朕と  
一心になりて力を國家の保護に盡さは我國の蒼生は永く太平  
の福を受け我國の威烈は大に世界の光華ともなりぬべし朕斯



も深く汝等軍人に望むなれば猶訓諭すへき事こそあれいてや  
之を左に述へむ

一 軍人は忠節を盡すを本分とすへし凡生を我國に稟くるもの  
誰か國に報ゆるの心なかるへき況して軍人たらむ者は此心  
の固からては物の用に立ち得へしとも思はれず軍人にして  
報國の心堅固ならざるは如何程技藝に熟し學術に長ずるも  
猶偶人にひとしかるへし其隊伍も整ひ節制も正くとも忠節  
を存せざる軍隊は事に臨みて烏合の衆に同かるへし抑國家

を保護し國權を維持するは兵力に在れば兵力の消長は是國  
運の盛衰なることを辨へ世論に惑はず政治に拘らす只々一  
途に己か本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よ  
りも輕しと覺悟せよ其操を破りて不覺を取り汚名を受くる  
なかれ

一 軍人は禮義を正くすへし凡軍人には上元帥より下一卒に至  
るまで其間に官職の階級ありて統屬するのみならず同列  
同級とても停年に新舊あれば新任の者は舊任のものに服従



すへきものそ下級のものは上官の命を承ること實は直に  
朕か命を承る義なりと心得よ己か隸屬する所にあらずと  
も上級の者は勿論停年の己より舊きものに對しては總て敬  
禮を盡すへし又上級の者は下級のものに向ひ聊も輕侮驕傲  
の振舞あるへからず公務の爲に威嚴を主とする時は格別な  
れとも其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を專一と心掛け上下一  
致して王事に勤勞せよ若軍人たるものにして禮義を紊り上  
を敬はず下を惠ますして一致の和諧を失ひたらむには當に

軍隊の蠱毒たるのみかは國家の爲にもゆるし難き罪人なる  
へし

一軍人は武勇を尙ふへし夫武勇は我國にては古よりいとも貴  
へる所なれば我國の臣民たらんもの武勇なくては叶ふまし  
況して軍人は戰に臨み敵に當るの職なれば片時も武勇を忘  
れてよかるへきかさはあれ武勇にも大勇あり小勇ありて同  
しからず血氣にはやり粗暴の振舞なとせんは武勇とは謂ひ  
難し軍人たらむものは常に能く義理を辨へ能く膽力を練り



思慮を殫して事を謀るへし小敵たりとも侮らす大敵たりとも懼す己が武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれされは武勇を尙ふものは常々人に接るには温和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ由なき勇を好みて猛威を振たらは果は世人も忌嫌ひて豺狼などの如く思ひなむ心すへきことにこそ

一軍人は信義を重んずへし凡信義を守ること常の道にはあれとわきて軍人は信義なくては一日も隊伍の中に交りてあら

んこと難かるへし信とは己が言を踐行ひ義とは己か分を盡すをいふなりされは信義を盡さむと思は、初より其事の成し得へきか得へからざるかを審に思考すへし臆氣なる事を假初に諾ひてよしなき關係を結ひ後に至りて信義を立てんとすれば進退谷りて身の措き所に苦むことあり悔ゆとも其詮なし初に能々事の順逆を辨へ理非を考へ其言は所詮踐むへからずと知り其義はとでも守るへからずと悟りなは速に止るこそよけれ古より或は小節の信義を立てんとて大



綱の順逆を誤り或は公道の理非に踏迷ひて私情の信義を守りあたら英雄豪傑ともか禍に遭ひ身を滅し屍の上の汚名を後世まで遺せること其例尠からぬものを深く警めてやはあるへ

一軍人は質素を旨とすへし凡質素を旨とせされは文弱に流れ輕薄に趨り驕奢華靡の風を好み遂には貪汚に陥りて志も無下に賤くなり節操も武勇も其甲斐なく世人に爪はしきせらるゝ迄に至りぬへし其身生涯の不幸なりといふも中々愚

なり此風一たび軍人の間に起りては彼の傳染病の如く蔓延し士風も兵氣も頓に衰へぬへきこと明なり朕深く之を懼れて曩に免黜條例を施行し略此事を誠め置きつれと猶も其惡習の出んことを憂ひて心安からねは故に又之を訓ふるそかし汝等軍人ゆめ此訓誡を等閑にな思ひそ

右五箇條は軍人たらむもの誓も忽にすへからすさて之を行はむには一の誠心こそ大切なれ抑此五箇條は我軍人の精神にして一の誠心は又五箇條の精神なり心誠ならされは如何な



嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用にかは立つべき心  
たに誠あれば何事も成るものそかた況してや此五箇條は天地  
の公道人倫の常經なり行ひ易く守り易し汝等軍人能く朕か訓  
に遵ひて此道を守り行ひ國に報ゆるの務を盡さは日本國の蒼  
生舉りて之を悦ひなむ朕一人の憚のみならむや

明治十五年一月四日

### 御名

### 勅諭

朕茲に大統を嗣ぎ列聖の遺烈を承け萬世一系の帝祚を踐むに方り特に  
朕か親愛する陸海軍人に告く  
惟ふに皇考曩に汝等に軍人の精神五箇條を訓諭し一誠以て之を貫く  
きを示し給へり汝等軍人は夙夜此聖訓を奉體し累次の征戰を経國威を  
宣揚し皇基を恢弘し以て曠古の偉績を冀成したり  
朕は朕か統率する所の軍隊は即ち是れ皇考の慈育愛撫し給ひたる所



陸海軍人に賜はりし勅諭

目 次

|       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 釋     | 義     | 忠     | 禮     | 義     | 信     | 質     |
| 節     | 儀     | 勇     | 義     | 素     |       |       |
| ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... |
| 一     | 一     | 六     | 一     | 一六    | 一一    | 一一    |

の軍隊なるを念ひ汝等軍人の忠勇に信倚し皇考の遺業を紹述し倍々  
 皇國の光威を顯彰し億兆の福祉を増進せむことを冀ふ汝等軍人は皇  
 考の遺訓に由り以て直に之を朕か躬に效し愈々奉公の志を盡くし思  
 索の選を慎み字内の大勢に鑑み時世の進運に伴ひ拮据勵精各其本分を  
 竭くし朕か股肱たるの實を擧げ以て皇謨を扶翼せむことを期せよ

大正元年七月三十一日

御名御璽



津永少尉

- 全身に數劍を負ひ——津永遭られたか確かりしろ……………三一
- 敵もさるもの——その素早き行動よ……………三五
- 無念や逆襲——我は強襲又強襲……………三九
- 只々感謝の外言葉はない——互に酌み交す別れの盃……………四四
- 嬉しや偵察隊の鐵條網破壊——死を決せし田村軍曹青木伍長……………五〇
- 殘念無念——必死を期せし最後の雄々しさ……………五四

常陸丸

- 玄海洋上千載の恨事——忘れ得ぬ悲しき記憶……………六一
- 常陸丸佐渡丸字品を發す——土産はどつさり敵の首……………六三

向井中尉

- 須知中佐の生ひ立ち——軍人志望の少年……………七〇
- 俣説湖山池——湖山長者の權勢太陽を呼び戻す……………七四
- 其朝の物語——長者失望して投身する……………八三
- 青島へ舟を渡して——源次郎友を救ふ……………九〇
- 闇に燃ゆる怪光——僕が正體見届けてやらう……………九八
- 軍隊生活へ——源次郎教導團に入る……………一〇三
- 朝霧暗き中に敵艦——砲聲を味方の演習と誤る……………一〇六
- 上村艦隊晝寝か——世論囂々と沸騰す……………一一一

- 優れた才能——僕は政治家になるよ……………一二七
- 迫害に屈せず——色々な難癖をつけられて……………一二三



父歸る——思想を異にする講師……………一二八  
 散策の夜——強く生きて生き抜け……………一三四  
 淋しき友——君はセンチメンタリズムだ……………一三九  
 日露の開戦——元太郎の華々しき戦死……………一四二

### 騎兵一等卒

春の遠足——あどけなき兒童の會話……………一四七  
 肉弾で戦ふまでだ——日本武士道の眞精神……………一五二  
 鎮守社へ日参して——合格を祈願する留吉……………一五八  
 馬術練習所に通ふ——一騎遠乗りに……………一六一  
 近衛騎兵聯隊に入營して——日露の風雲急を告ぐ……………一六五  
 故郷の山河に暇乞ひ——二度と見ぬ覺悟……………一七二

行きちがひ——征露の旅に出づる軍さ人……………一七五

### 日本海的大海戦

アドミラル東郷——忠君愛國の權化……………一七九  
 バルチック艦隊の北上——敵艦見ゆ……………一八一  
 皇國の興廢此の一戦にあり——各員一層奮勵努力せよ……………一八五  
 戦闘開始——旗艦オスラビヤの沈没……………一八八  
 水雷攻撃——勇敢なる攻撃隊……………一九二  
 夜襲決行——日東健兒の意氣を見よ……………一九五  
 古今未曾有の大捷——忠勇義烈の我が將士……………一九八  
 御稜威によりて——偉なるかな東郷平八郎……………一九九



### 噫 高崎山

- 千二百米突高地の惡戰苦闘——仇は必ず取つてやるぞ……………二〇三
- 鐵條網破壊——將棋倒しの缺隊……………二〇七
- 高崎聯隊の救援——是れ又苦戰に陥りて……………二〇九
- 今齋藤別當實盛——擔架に乗つた田中少佐……………二二二
- 噫高崎山——血と肉とを以て占領した……………二二六

### 戰 陣 夜 話

- 長曾根虎徹の康直——刀と兜の名人揃ひ……………二一九
- 天正勝九郎との試合——割腹して果つ……………二二三
- 虎徹江戸に出發——苦心名工となる……………二三三

- 若き男女の身投——救ふて見れば又意外……………二三七

### 巨熊王國と屯田兵

- 雨龍川原の大格闘……………二四二

### 即墨の斥候戰

- 深夜の偵察——月下の銃聲……………二四九
- 鎧を外した利那——襲來した敵……………二五二
- 今井少尉敵の包圍に陥る——少尉は挫と打ち仆れた……………二五四

### 從 軍 記 者

- 志を同じうせし二人の友——一人は野戰病院のベットの上一……………二六一
- 親しき友の失望——瀬川君さう失望し給ふな……………二六六



奇しき邂逅——變り果てた瀬川の境遇……………二七〇

何時に變らぬ親しき友——まあさう悲觀しないがいいさ……………二七七

官吏生活へ——官吏生活は結構だね……………二八二

新聞記者へ——パンを得る爲めです理想はありません……………二九一

戦地へ！——戦地へ——瀬川君戦地へ行つてはどうか……………二九五

雪中の露營——温き友阿……………三〇二

奮闘、無慘——敵の包圍に陥りて……………三一〇

意外の友の消息——藤本もう一度目を開いてくれ……………三一四

おい鷺山君？——瀬川か——奇遇又奇遇……………三一八

遼陽城外快死の斥候——瀬川君君に頼むよ……………三二五

敵の急追撃に遇ふて——一弾は瀬川の右肩を貫通した……………三三〇

野戦病院——瀬川安らかに行けよ……………三三四

# 君に捧げて

海軍中將 宮岡直記  
陸軍少將男爵名和長憲 共述

今や、日本は、國民的團結を根據として、世界の生存競争場裡に立つてゐる。それに、われわれは、國の進歩發展と共に、種々の問題に遭遇してゐる。内には、國民としての統一を必要とし外には、他列強國に對する自衛を缺くことが出来ない場合にゐる。

このやうな大切な時代に、國家の干城であるべき筈の軍隊の強弱、士氣の盛衰は 直接に國家の運命に關はつて來ること、明かな事實である。

明治天皇陛下は、勅諭に「我國の稜威振はさることあらば、汝等能く朕と其憂を共にせよ、我武維揚りて、其榮を耀かさば、朕汝等と其譽を借にすべし。」と仰せられてゐる。軍人たるものは唯恐懼、陛下のために、其職を守り、其本分を守りて、國家の保護に力を盡さなければならぬ。

## 忠 節

世界は廣く 天地は長久であるといふとも、日本のやうな美しい國家は、決して他には無い。



畏れ多い事であるが、わが皇室の御本源と、われわれの祖先とは、もと一つの系統から分れて出たもの、言葉を換へて言はうなら、皇室は直系に在して、千萬年の後までも神と現はれ給ひ、われらは傍系であつて、永く變らない臣民であるのだ。此關係は、仁恵と忠義との交換のやうに思つてゐる支那流の解釋や、治者と被治者との約束のやうに心得てゐる西洋風の思想では、此國の有難さが了解する道理はない。われらと皇室とは、密接いた儘離れないものであるばかりか、皇室のわれら臣民に臨ませらるゝのは、實に、絶對無限のものである。『天皇は神聖にして犯すべからず。』との憲法の規定は、殊更にさう御決定したのではなく、國民の思想が、常にこれを信じて疑はないからである。

此信念が、能く我國をして世界萬國に冠たる國體を作り上げしめたのである。皇祖天照大神の、萬世一系の御神勅は申すも畏れ多いが、國民は、又よく、此神勅を奉戴し、純美な誠心を盡して、皇室を尊び奉り、國家を保護したのである。上は國民を見らるゝこと子の如く、下は、大君を尊ぶこと慈母に仕ふるやうな、圓滿な靄々とした感情は、今も猶生々としてゐるのであつて、幾萬年の後も決して渝らないのである。

皇室があつて、初めて國家があり、國民がある。これが、日本の國であるのだ。家族に於て、

両親が、絶對に尊くありがたいやうに、日本の國に取つては、神の御裔であるところの皇室ほど絶對無限に尊くもあり、また、ありがたくもあるものは他には全くないのである。このありがたさ、この尊さ、これは、決して生活の形式だとか、方便だとかの必要から來たものではない。ただただ、ありがたさに涙を零し喜んで、この世界に比べのない、萬世一系の大君がしるしめす國家を、永久に守り、わが皇室を萬歳の末までも戴き奉れば、それでよいのである。

この美しい感情、これが、大君と國家との上に注がれて、君のため、國のためには、死をだも辭せないといふ、固い意志となつたものが、即ち忠節と名づけられるゝところの徳であるのだ。

五箇條の勅諭の第一に、先づ『軍人は忠節を盡すを本分とすべし、云々』と宣はせられたのは、即ち此虚を御諭しになつた事と推察し奉るのである。敢て軍人ばかりではない。日本國民たるものは、貴いと賤しいとの隔、上と下との別なく、君に忠節を盡すべきは無論の事であらなければならない。が、わけても、軍人は、この、忠君愛國の熱誠を、わが身の本分としなければならぬ。われわれ國民が統一されて、強盛な國威を形成してゐるのは、全く忠君愛國の熱誠によつてであるのだから、軍人は、この統一した、強い、盛んな、そして世界に赫々たる國體を持つてゐる大日本帝國の干城であるのだ。擁護者であるのだ。だから、一朝事ある時は、わが身命を捨て



て、父母妻子を省みず、大君のために、國家民衆のために、眞先に立つて、敵と相見えなければならぬ。この時に當つて、軍隊に最も必要な事は、人の和を得るといふことであるが、その人の和は、何によつて得られるかといふのに、利害の觀念では、決して思ひ切つた働きが成し得られるものではない。ただただ、陛下と國家とを思ふ事によつて、衆心一致するより外には道がないのである。

かう述べて來ると、忠節といふ事は、戦時に限られた事のやうにも聞えるが、決して、そんな事はないので、軍人として、軍隊生活をしてをる以上、その身は、最早わが身のものでもなければ、父母親戚のものでもない。軍人的生活に這入る其日から、その身は、陛下と國家とに獻げた身體である。それだから、軍隊にある間は、自分の職務が、護國干城である。その一舉一動も、悉く忠誠の心から出なければならぬものである。日々夜々、どんなに國家を擁護し、皇室を泰山の安きに置き奉らうかを思ひ、その階級に應じた軍務に熱心従事したならば、それが絶大な愛國心と現はれ、この上もない忠節となるのである。

軍人としての職務を不斷忠實に完ふしやうとするには、又、平生に於ける心掛けを善くしなければならぬ。つまり、平素から、國のためであるといふ精神で、自分に當てられた務めを、最

も忠實に果さなければならぬので、一つの學課にしる、一つの技術にしる、その心持で勵まなければならぬ。自分が勵まなければならぬのは、國のためなのであつて、自分の勤めが充分でなければ、國のためには不利益な事が出來ると、常にさうした考への下に職務を充分熱心忠實に盡さなければならぬ。かうした考へが、總ての軍人の上にある事は、やがて、強兵の原因である。のみならず、かうした忠實の念が、萬事の上には現はれると、どれだけまた平時の忠節が盡されることになるかわからない。例へば、軍隊の器物であるが、これは國の器物であるのだから、なるたけ浪費しないやうに丁寧に取扱ふ。給與された物でも大切にする。國家の給與した物であるから一層大切にせねばならぬといふ精神を涵養する。かうした精神の涵養が、立派に各人の上に保たれた時、日本の軍隊は、それこそ、今迄より一層少い經費によつて、より多くの軍隊が維持される事にもならぬ。

何時でも、戦争は、強いばかりが最後の勝利ではなく、財も亦これに伴はなければならぬといふ事が事實であると知つた時、軍人たるものは、よろしく忠實の現實に努力して、平生に於て、一人以て五人に對する實力を作らなければならぬ。これ實に又、平時に於て、上に忠節を致し報國の主旨を完ふする第一の道である。



禮儀

日本は、昔から東洋の君子國であると言はれてゐるが、これは、單に他の國から想像されてさう呼ばれ慣らされたものではなくて、さうした實質があつたのであらうと思はれる。これは必ずや日本國民性の一つであつて、決して儒教や佛教に依つて傳へられた道ではないので、太古の祭式の状態を察しても、他に對しての敬稱語の多いのを見ても、どれだけ、われわれの祖先が、長上に對して丁重な禮を盡し讓を極めたかが判明する。其後、武士の世となつて後ですから、主従父母兄弟の間にも嚴然とした一種の禮讓が存してゐた。敵將に向つても、常に此禮が守られ、矛を交へる瞬間に於ても、其敵を斃したる後に於ても、相當の禮が致され、決して、これに無禮な舉動を加へる事を宥さなかつた。かうした美しい物語は、日本の歴史の上について見ることが出来る。

日本では、もう、古くから禮式典禮が重んぜられてをつて、その規定は綿密を極めてをつたものだ。そして、粗暴に渡らなければならぬと思はれる武家時代に及んでさへ、諸流の諸禮法が行はれて、夙く武士たるもの、禮式としなければならぬ條々が定められてゐた。其他、家々に

は、家法と稱へられる細密な禮儀が規定されてをつて、人々は、其故實典禮を基として行動し、苟くも無作法であり、放縱なるものは、甚く世間から「あれは禮儀作法を知らぬ奴だ。」と言つて蔑視されたものである。

然しながら、其禮が如何に作法に適つてをつたとて、心からでないものは、眞の禮として對へる事は出来ないもので、禮式作法の次第は、それは諸家の規定たる次第書通りの禮が、眞の禮であるといふ事は出来ない。形式ばかりの禮式、それは空しい禮で、實のある禮ではない。即ち禮儀は、形式そのものではなく、其形式の奥に、更に大切な禮の本質である精神の禮を含ませたものでなければならぬ。其本質が即ち禮の根本なので、此本質こそ、禮を致すべき對者に對しての、自分の心からの親しみであり、尊敬の念でなければならぬ。

軍人の敬禮の中には、上官に對しては、溢るゝばかりに美しい熱誠的の尊敬の念が籠つてをらなければならぬ。下の者に對しては、誇りなき親しみと同情が籠つてをらなければならぬ。かうしたお互ひの美しい至情が、敬禮といふ一つの形式によつて、其場合場合に現はされて行くので、唯、單に、舉動の上に敬禮らしく見えればよいなぞと考へるのは、それこそ全く失敬といふものだ。



禮とは、一面に於ては、對者に向つて、自分の持つてをる心持を、最も善い手段によつて他に表はすものであるが、然し、こればかりが禮の道ではない。人が居ないから無作法であつてもかまはない、上官が居ないからだらしない風をしてもよいかといふに、さうした行動は、やつぱり禮儀に當てはまる道では無い。禮は、自他の區別が附いてをる時にのみ現はさるゝばかりの道では無い。總ての時、あらゆる場所に、常に君をまし、父母をまし、兄弟親戚朋友、特に、軍人としては、上官同僚が常に其處に居るものとして、不斷の禮儀を行はなければならない。これが、その心からの眞の禮であつて、自他の區別がついた時の形式の禮儀は、則ち不斷の禮道の形式の現はれでなければならぬ。で、言ひ換へれば、禮とは、人間の純精な心性の發露した人倫の大道でなければならぬので、かうした道によつて、始めて社會の秩序も保たれるものであると思はなければならぬ。各自に手前勝手な行動を遣つて、其處に少しの禮讓も保たれなかつたならば、君臣、父母兄弟、夫婦、他人若しくは男女の禮もなく、世間は、實に不秩序極まる亂雜の社會と化つてしまふであらふ。禮儀は、實に軍人のみならず、萬人の保たなければならぬ道であるのだ。

禮儀が、世界の誰にも守られなければ、國民は、一日たりとも安泰の生活を續けることが難し

くなるが、個人間に行はれると、禮讓となり、友情となり、國民間に行はれると、國民の結合の力を養はしめ、軍隊に行はれると、其處に上下の和睦となり、統御となり、服従となるので、かの所謂軍規のやうなものも、亦其一部であるといつてよいのである。

軍隊の生命とするところは、秋毫も犯すべからざる軍紀風紀である。整肅不亂の相互の禮式である。若し此二つが亂れるやうであつたら、其軍隊は、もう軍隊としての生命を失つたもので、如何なる場合にも何等の効をなし得ないであらう。例へば、苟くも生命を賭けて敵と勝敗を争ふといふやうな場合に、軍隊内に不和があり、或は上官と部下との反感などがあつたりして、上の指揮命令が下に通らないといふやうな事があつたら、全く其軍隊は活動の力を缺いたもので、決して満足の働きの出来やう道理がない。現今の軍隊的訓練の上には、幸にして此關係が圓滿に行はれてゐるのであるが、一般の社會では、その現實の上に於て、さうでない場合が随分に見うけられる。こゝで、軍隊生活、軍隊教育の必要が、一般國民の上に最も必要であるやうに思はれるのである。

人間が社會を形づくり、國家を作つて生活してゐる間は、各自がてんでに勝手な事をやつて、お互に何の關係もなしで行かうといふやうな望みは、到底通るものではない。既に民衆が一所に



集つて協同の生活をしてをる以上、其團體は、常に統一され常に結合して行かなければならない必要がある。そして、一樣に圓滿に生活し、利害を争ふこともなく、衝突を避けて、愉快に人生を送らなければならぬ。これは、敢て求めてさうしやうといふ考へではなく、全く、人間が社會に立つて生活して行く上に當然來なければならぬ歸着點であつて、お互に禮讓の道を盡す高尚な考へが社會一般に行はれてこそ、創めて君子國とも言はるべき、平和なそうして理想的の社會を現出する事が出来るのである。

### 武 勇

武勇とは何であるかといふ定義や内容に就ては、極めて不明瞭に解釋されてゐるのが常のやうで、或者は武勇とは百般の武藝に通じる事であると考へてゐるし、或者は又、筋骨たくましい力量者のやうにも心得てゐるらしい。世に所謂武勇傳など呼ばれる物語本の主人公が、往々にして、例へば五十人力ある強者であつたり、身長六尺五寸、仁王のやうな腕の所有者で、三十貫目の鐵の棒を隆々と振廻すところから、其事が即ち武勇だとも思はれてゐるやうであるが、然し武勇とは、唯こんな性格ばかりを指して名づけられたものであるとは思はれない。若しも、さうした力量者即ち武勇の人と言ひ得るなら、己の其力量を鼻にかける傲慢不遜の人でも武勇の人であると呼ばねばならなくなる。然し、決してさうではないのである。

人によると、又、武勇とは、單に死を畏れない事だとも解釋されてゐるやうである。どんな困難に出逢つても、死といふ事を恐れなければ、きつと其事を成就する事が出来る。例へば、軍人が戰場に立つて、卑怯未練の行動をしたり、敵に後を見せるといふのは、死を恐れるからで、武勇とは、死を見る事を決して恐れぬ事を言ふのであると説明するのである。然し、われわれは、



かうした事の説明を以て、直に武勇と解釋する事はどうしても出来ない。といふのは、世の中には、随分、無思慮の者が多くて、理由もなく生命を粗末にするからである、かうした種々雑多の自殺者をひつくるめて勇士の名に宛てたら、恐らく眞の武勇の士は、其辱めに憤慨することであらう。昔の人は、よく智仁勇といふ事を言つたが、これは人間の心の作用である智情意を説明したもので、智は人間の智の働きを、仁は人間の美しい感情の働きを、勇は人間の意志の働きを指してをるのであると言はれる。されば、智情意の作用が單獨で作用することの出来ないやうに、勇は、他の二つの作用に補助された意志の作用であると解すべきであるから、われわれは、何處までも、無謀突飛に、生命知らずの事をするものを勇士といふことが出来ないといふ譯が、かうした理由から斷言されるのである。

勇は、人間の心の働きの中で最も強固であるところの意志の作用即ち正しい所信を貫く意志であるといふ説明が、以上で附いたとして、なら、その勇と武勇とのけじめは如何といふに、武勇は、勇に武の附加されたものであるから、勿論勇と武勇とは異なるところがあるべきで、其相違は、勇は精神的の氣力、武は技術的の修養であるといふ事が出来る。これを併せ有するが即ち武勇で、人に、いくら勇ばかりがあつたからとて、これを完全に現はす武がなければ、いざといふ

場合に、何の役にも立たない。そこで、軍人は、常に武を練る必要があるのである。

さて、此武勇が、軍人の上に、常に現はれるには一つの方途を取つて来る。一つは進取活動の氣象であり、他は堅忍不拔の精神である。然し、かう言つたとて、此二つのものは、決して、元から別れたる二つのものであるのでは無く、一つの武勇から發現するものであるのである。

先づ第一の場合を説明して見やう。軍人の最大なる任務は、國家の擁護といふことである。國運の進歩發達を期する事であり、皇室を泰山の安きに置くべく、國家を傷けざるべく、帝國の國弊を完からしめる事にある。平時に於ては、これがために、あらゆる練習をし、あらゆる注意をし、ある限りの修養をしてゐる。さて、一朝事ある場合には、國敵に對して、殊に此進取的氣象の必要であることを見るのである。何れの時、如何なる場合を論ぜず、國家の利害安危の上から打算して、自分の必然取るべき任務なら、萬難を排し、或は自分を犠牲にしても、これが責任を盡さなければならぬ。これが眞の勇氣であるのである。

次に、堅忍不拔の精神とは、唯これを消極的方面から見ても、國家に生命を許して、君國の爲に犠牲たらんとするものは、當然、其爲に死を辭することの出来ない覺悟を持つてをらなければならぬ。自己の國家に對する任務を遂行する上には、尠からぬ困難があるで



あらう。然し、それに打勝つだけの精神的修養が無くては、到底勇ある人として許すことは出来ない。自分には自分の慾望がある。けれども、既に國家の身と許した以上は、到底自分の慾望を満足させる事の出来る筈が無い。

自分は國家の犠牲であるのであるから、よし如何なる困難に遭遇しても、きつと堪へ忍ばう、そして、一意専念、國家の爲に謀らうといふことには、餘程の大勇を要するので、これには又、不斷の修養を尤も必要とする。

斯の如く、武勇とは、精神教育に依つて得らるゝものであるので、其完全なる武勇の現はれは即ち大和魂の涵養に俟たねばならない。此精神の立派に涵養されてをる者こそ取も直さず大勇士といふべきで、此涵養の薄い武者で、たゞ血氣の勇にかられ、己れの武藝に慢するものが取も直さず小勇士で、此手間の士は、えて取返しつかないやうな境遇に落入るのが常である。之に反して、大勇は性に似たりとも言はれる位、大勇士は概して温厚であり、靜肅であり、沈着であり、思慮的である。然も、君國の爲には、一身を犠牲にし、節に當つて一貫し、難に臨んで決して屈しない堪忍力を持つてゐるものである。従つて大勇士にはあやまちが少い。又、小勇士の一面粗暴なるに反して、大勇士は優美に富み、情に厚いのが特長である。

軍人は、常に、皆かうした大勇士である事を心掛け、不斷に、武勇の上に立つやう。平素の涵養を怠つてはならない。「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山櫻花」日本の軍人たるもの、其特有の精神を涵養して、常に武勇の人たるべく充分の努力をしなければならぬ。



## 信義

信義を守るといふ事は、人間たるもの、道であるが、殊に軍人は信義を重んじなければならぬと勅諭に仰せられた理由は、信義の道が、尤も衆團生活に必要な事であるところから、かく仰せられたのであつて、軍人の隊伍の中にあつて、圓滿に交際して行かれるのは、信義によつて保たれる事をお教へになつたのである。

陛下は、此信義を、勅諭の中に解せられて、「信とは己が言を踏行ひ、義とは己の分を盡すをいふなり」と仰せられてある通り、信義ある行爲とは、正しい道を踐んで、曲ぐる事の無い公明正大な行爲と、義務を重んじ、責任を果す自覺心とに出づるものである。

信義とは、言ひ換へれば、公道を踐んで屈せず恐れぬといふ正義の心であり、自分が自分の行爲に對して、一步も誤謬の點が無いといふ、確實な、そして明瞭な信念であるが、又、朋友近親其他に對しての温かい同情の念も、此内に含まれてゐる。で、信義は、一面に於ては、確固とした自覺心であつて、他面にあつては、温かい美しい同情心であることになる。

自分の行爲に對しては、一步も誤謬の點がない、自分の行爲は、俯仰天地に愧ぢないといふ確固とした行爲は、總て、他人や國家に對して、きつと温かい同情心の念の籠つたものであらう。されば、かうした誠實信義の行爲は、必ずまた人を感化し、郷黨社會に好影響を及ぼすであらう。

だが、茲に最も注意して置かなければならない事は、自分の品性や行爲に對して、かうまでに確とした自覺力は、容易にこれを得らるゝものではないといふ事である。誰しも、自分をそんな悪いものとは思はないのは勿論の事、自分のする事に悪い事は無いと思つてゐるやうであるが、そんな根柢の無い、淺基な自覺力は、必竟己惚といふもので、それが決して確とした信念であるとする事は出来ない、己惚といふことは、自分を誤る最も大きな惡徳である。一度己惚の心が增長すると、社會からは蛇蝎のやうに忌み嫌はれ、自分の徳性は忽ちに墮落し、智識は次第次第に退歩してしまつて、終には、世の中から、有害無益の人間としてあつかはれて、時勢の幕の外に葬り去られてしまふ。

われわれのいふ信義ある者の自覺力とは、そんな淺薄なものでない。われわれのいふ確とした信念なるものは、決してこのやうな皮相なものではない。われわれが信念を築き上げるまでには、非常な工夫と修養とを要するものである。



われわれは、先づ、道徳上の修養を積んで、善悪邪正の明晰な觀念と、正義正道を踐んで屈する事の無い、物に撓まない勇猛心とを養はなければならぬ。この修養の基礎を得てこそ、初めて、自分の行爲は、決して社會に恥ぢるものでないとの信念が持てる筈である。

このやうな信念によつて行はれた判断は、何時でも、明確でそして正當である。このやうな信念によつて行はれる行爲は、誠實でそして利害得失の爲に動かされる事のないものである。従つて其人の行爲は公明正大であらう。權威もそれを屈することは出来ない。利益もこれを誘惑することは出来ないであらうと思ふ。かうした信義の道を盡すこそ、人間が善美的であつ目のて、信義をあらゆるだけ盡すことに爲る。

陛下は、たゞ信義を重んずべし守るべしと仰せられたただけであるが、われわれは、ただ重んじ守るだけでない。それを人一倍盡す事に心がけてこそ、尤も思召し召しにかなつたものになるべきである。これは容易に出来るものではないが、然も軍人のやうな衆團生活の間に於ては、殊に人よりも餘計に信義を盡しあふといふ事が必要であるのである。然し、其信義を盡すといふことも、決して報酬を目的としてはならない。報酬を目的としたら、信義の甲斐が無くなつてしまふ。それに、報酬を目的としなくとも、自ら酬いられるものだ。反對に、報酬を目的としたる行爲に對

しては、感謝するべき理由がなくなる。その二つの行爲の別れ道は、まことに大切な事で、これで、其人の信義不信義が明かにされるものでもある。われわれは、一意、道徳上の修養によつて築き上げられた、確とした信念によつて、正當の行爲を誠實に行ふといふ事を、其理想としなければならぬ。

このやうにして、信義の行爲は、即ち言行の一致を意味するもので、其言葉と其行爲との間に不一致があるといふのは、要するに其行爲が確固とした信念から出て居らない事を示すものである。よつて又、誠實信義の行爲は、常に責任を重んずるものである。言行の一致といふ事が、總て自分の責任を重んずるといふ事であるのである。殊に軍人は、其一舉一動に、重大な責任を思ふて、どんな些細な事であつても、極めて緻密な注意と慮とを廻らして、忠實にこれを行はなければならぬ。唯、他人の命令に従つてやるのだからといふ考へで、無責任な其場免れの事をやる。かうした行爲は、苟くも名譽ある軍人の成すべきことでない。

責任を以て事に當る心のない者は、軍人として一日も立つて行く事が出来ない。軍事的行動は一つの信用を基礎として行はるべき事が非常に多いからである。兵士相互の間に、一隊となり一軍となつて共同の活動をなし得られるものは、各自の間に大きな信用があるからで、其共同生



活 共同的動作に於いて最も忌むべき事は自己的の主張である。  
軍人の職務は、自愛といふよりも、寧ろ他愛でなければならぬ。彼等が、陛下の御下に、身心を獻げ奉り、國家の干城として立つた以上、共同の爲に、許諾を重んじ、責任を盡す上には、自分の利害を顧みざる意氣があつて欲しい。其職務の本質から見ても、かくして信義は實に軍人の生命である。

質 素

一 質素を旨とすべき事は、唯に軍人ばかりの慎むべき道ではない。この事は、一般國民に下されたかの戊申詔書に於かれても、陛下は、萬人の驕奢を戒められてをられる。然しながら、軍人に於ては、なほ一層、その事を慎まなければならぬ立場にある。

その質素の美德である事は、何人も言ふところであるが、それは何故に美德であるのであらう。又、驕奢の惡徳である事は、これ又、何人も言ふところであるが、それは何故に惡徳であるのであらう。陛下も、これが、傳染病の如くに蔓延する時の來らん事を恐れられたが、かくまで懼るべしとさるゝ驕奢の弊風とは、そも何物であるのであらう。

世の中の誰しも、口に美味芳醇を思はぬものは無く、身に美服を纏うて快としないものは尠いであらう。快樂は人の欲するところであり、苦痛は人の避けんとするところであらう。これが恐らく人情といふべきものであらう。然し、出來得る限り放縱怠惰に、出來得る限り美味美服に志すことが、眞に人間の快樂の極まるどころであらうか。さうした考へを正當と信じてゐるのは、それは修養の無い人でなしの上の事である。昔からの



警にも、奢る平家は久しからずとやらで、古から、放縦の者の上には、きつと最後の運命といふものがやつて来る。

口舌の欲、ただそれだけでさへ際限がない。かうした事から、贅澤な放縦不規律な生活に這入る事は、やがて人心の大墮落する時である。悪徳に染み易いが人の心であれば、快樂の真中に立つ時、人心には道徳も修養もなくなる。遂には、刹那刹那の慾望の儘に、次々に快樂を追つて、墮落に墮落を重ねて行くやうになつてしまふ。このやうになつた人心は、丁度、悪い水が腐敗して、各種の毒菌毒蟲が其中に生じたやうなもので、到底これを直すに由はない。あつたら男は、かうして、悲惨な運命の下に最後の水を飲んで終る。各自のかうした腐敗墮落は、聽て社會の腐敗墮落で、蝸蟲のやうな名目の毒は、社會の底にまでも喰ひ入り、その國家は、到底救はれないやうになる。

「これほど、個人の腐敗といふものは、一國の上に重大な關係を持つものである。陛下は傳染病のやうにとお懼れ遊ばされたのである。奢侈は、驕豪となり、浮華となり、虚飾となり、國民無氣力となる。陛下は、國民的元氣の阻喪が、此國を呪ふものであることをお憂ひなされたのである。」

奢侈贅澤は、國民の元氣を、このやうに萎微せしめるものであるばかりか、國の經濟の上に、非常な寒心すべき結果をさへあたへる。畏れ多くも、明治天皇陛下は、急に進んで行く生活状態の上に、かうした事の來るを御心配遊ばされて、戊申の年、かの訓諭の詔書を下されたのであるから、國民は、深く其歎慮の程を拜察し奉つて、相戒め、勤勉質素の道につくべきであらう。これこそ、一意大正の陛下に盡し奉るの道である。

殊に、苟くも軍人となつた以上は、何時戰場に立つても差支へないだけの準備をして置かなければならない。修養を積んでをかなければならない。戰場とならば、弊衣粗食位は覺悟の前でなければならぬ。戰鬥の都合によつては、一日も、二日も、水も吞まずに活動しなければならぬ。いやうな事が起るのは、殆んど當然の事といつてもよい。軍人たるものは、このやうな困苦缺乏、否、これ以上の艱苦窮乏に際しても、平然として、勇氣を阻喪せしむるやうな事なく、難に處して、勇氣百倍するやうでなければならぬ。これには、どうしても、平素の修養にまつ外はないのであつて、軍人たるものは、其上官であるもの程、殊に此修養ありたいものである。部下の苦樂は、これを上官に於ても分つて致す心掛を持ちたいものである。若し、一上官にして、身を持つること放縦であり、奢侈贅澤であつたら、上の好むところ、下これよりも甚しきならぬ、部下



の放縦又更に甚しくなる事は、火を賭るよりも明白な事である。

何れの點から見ても、軍人たるものは、質素儉約を旨としなければならぬ。

軍人にして金錢を貪り、美衣美食を思ふやうな事があつては、それこそ軍人の資格を失ふものに當る。

然しながら、如何に質素を旨とし、儉約を旨としたものであつても、これを自分の軍人としての品位を保つ範圍に於てすべきは勿論の話で、質素と吝嗇とを混合するやうな事があつてはならない。

質素のうちにあつても、自らの用意とすることに於ては、決して缺くるやうな事があつてはならない。

そこで軍人が平素の心掛であるが、能く、兵卒等には、上からの支給の金が少くつて自分の用途に不足だといふので、故郷などから金を呼ぶものがあるが、それも心掛一つで、決して、不足する程のものではないのである。質素にすれば、確かに己を辱かしめずに軍務に従つて行かれるだけのものであるのであるが、つい、故郷の實家が、大して困りもしないといふところからして、事によせては金を呼ぶ。然し、幸にして其故郷の家が富裕の家であつたからよいものゝ、それが、

赤貧洗ふがやうの貧乏な家であつたらどうか、きつと、苦心慘慘して送つてよこすわけになる。然し、送つてよこされた金は、決してそんな立派な途に使はれない。富裕の家を持つ者は、例へば其實家への苦勞はさうでもあるまいが、これは、其金使ひの荒いといふ事が、必ず同じ隊の者に悪影響を及ぼす。

かゝる悪風を矯めすには、自分の身を顧みて、其分相應であるか否かと思慮をめぐらすを必要とする。其處には、貯蓄の精神を涵養する事を急務とする。昔、武士道は、浪費を戒めて、いざといふ時の貯蓄を教へてゐた。貯蓄の精神は必ず驕奢、風を防いでくれる事が多いであらう。驕奢の風さへ無ければ、欲心も起らず、心も平靜で、一意君國の爲に盡すことが出来るであらう。



卷頭に

遺恨十年といふ永い間、臥薪嘗膽の碎勵刻苦を積んで、私に一ふりの劍を磨いて居た我が大和民族は、今や時來たり、機熟して當時の怨を晴すべく、場所も同じ殺氣漲る遼東の山野に於いて日露開戦の幕は切つて落されたのである。

以來我が軍隊の精銳は凱歌に凱歌を擧げ、向ふ處敵なく、海に陸に、攻むれば陥しいれ、戦へば必ず勝ち、行くとして可ならざるはなく、仁川沖に敵艦を撃沈したを手初めとして、名にし負ふ鴨綠江の大河を徒渉して九連城を奪ひ取り、蓋平を賭り、金州を略して、連戦連勝の有様に武威を四海に轟かせてゐたが、然しこれは眞の戦ではなく、これは只前途に横はつてゐたる一大會戦の序幕に過ぎなかつたのである。それは只大海をも覆へし、山をも劈んとする大地震の前の小震動であつて、警を示すが様なものなのだ。大雨の沛然と軒を衝くの勢に先だつて、暗雲重



疊油然として湧き出づる狀に似たり。即ち天を震ひ地を覆ひ血河死山の活歴史の舞臺は、難攻不落と唱られた旅順港攻撃隊の手によつて始めて、そのフィルムを寫し出されたのであつた。其後人は人も知る得利寺の激戦、沙河の會戰、奉天や遼陽等の大激戦となり、或は延いては日本海の大激戦となつて、勇みに勇み、猛りに猛つた我が忠勇義烈な海國男子の大活躍の期に到來したのであつた。實に此の大激戦は、アドミラル東郷の名の如く此一戦を以つて、我が皇御國の興廢如何を決するに充分であつた。

實にさうであつたのである。戦旗は堂々大空に翻り、砲煙は山野をたて籠め、又た腥風が盛んに吹きしきつて、血河は時も場所もあらばこそ、其處、此處と縦横無盡に流れて、一見するも惨憺の念を起すに充分であつた。これ皆我が大和民族の同胞の犠牲なのだ。劍を提さげて先頭に呼號する少壯勇士あり、無念の涙を流し、友人と握手して殞るゝ者、怒髪天を衝いて敵を斬りまくる者、敵弾を受けて、あへない最後を遂げし者、見來れば、從軍將卒の意氣の高潮してゐた事は、そも幾何であつたであらう。

思ふ、我が國の名物はひとり富士の高嶺かは、八十氏川の流れを吸む同じ身は、名をこそ惜しめ、君國に捧ぐる我が身は、骨の千碎、肉の萬烈は固より脈ふ處ではなくして、誰しも瓦全を欲せず、玉碎を望む、彼等將士の床しくも雄々しい心根は、之れは誠に東海の天、雲を凌ぐ靈峰、白芙蓉の頂上に置く千古の雪の剣々と、輝く夕陽に榮ゆるが如く、春爛漫の吉野の櫻花、朝日に匂ふ山櫻の風に掲散る風雅な趣きにも似てゐないであらうか、月光淡き、高漠なる滿洲荒原の血鬨は、今なほ叱咤の聲を放つて、英魂は、誰れをか招ねいてゐるのである。

年波の去る流水の如く早や十有餘年、形骸空うして今日水冷しと雖も、當時の勇壯なる意氣は憂として聲を放ち、春風秋雨永へに我が大和民族の耳底に響き渡り、九段坂上大鳥居の奥深く護國の鬼となりて國民の捧ぐる感謝の涙に微笑を浮べ、或は廢兵院内の、陽光白づく小窓の下に横ばり、君國に捧げた殘餘の身を抱き、寂しく、當時の活舞臺の歴史を追想して自らを慰撫し或ひは殘櫻會に入り、僅かに散り残つた一瓣の名花を集めて、かほり床しい日東大帝の武門の意氣を、彌やが上にも發揚せん事を努めつゝあるのである。



嗚呼——至忠——至義。

これら將士が三軍を叱咤して、堅壘に迫りし當時の功勳を回想して、君に贈りし一塊の肉を弔はんとするのである。

# 津 永 少 尉

全身に數創を負ひて

——津永遭られたか確かりしろ——

津永少尉は、名は均と云つて茨城縣の出身で、嚴父の秀助は、當時縣會議員の名譽職を勤めてゐた。

今津永少尉の華々しい戦歴を記すに先だつて、先づ順序として、少尉の軍の行動から述べて見よう。津永少尉は京都の聯隊に屬してゐた。明治三十七年の九月二十日は、彼の有名なクロバトキン砲臺が、確實に我が軍の手に落ちた記念すべき、喜ぶべき日なのだ。クロバトキン砲臺陥落に續いて、松樹山を攻略すべき嚴命を受け取つた、我が津永少尉の聯隊が、直ちに各自に部署が定められ、着々準備に取りかゝつて、をさ／＼怠りがなかつた。松樹山の位置は、旅順本防禦の中でも、他の砲臺に比べて、凹狀に引き下つてゐて、盤龍山、二龍山、椅子山等の砲臺が丁



度包んでゐるかの様に、配置されてゐる爲め、同じ攻撃を加へるにしても仲々困難なのである。それは彎形になつた凹字状の窪みに向ふのであるから、攻撃の際には必らず、両方の凸出部から、今度は反對に、挟み打たるゝ事は、明白の位置にあるのである。地勢上の難易を論ずるの事は、まづ大體これ位として置き、扱て我が軍は、此の難攻の松樹山の敵軍に對して、攻撃着手の第一開始として、此の附近一帯の鐵道線路を、我が軍の手に納める事となつたのである。

此の時に際して我が津永少尉は、最左翼の守備を命ぜられたので、直ちに部下の兵士を率ゐて其の任に當つた。攻撃軍とは違つて、守備軍と云ふ役廻りは、あまり嬉しいものではないが、しかも少尉は、能く自己の任務を忠實に守つた。

苦心に苦心を重ね、惡戰苦闘の結果、漸く占領し、安堵の胸を撫で下すが早やいか、憎らしい敵は、鐵道線路を目がけて、前に倍した、精銳の軍で逆襲して來たのだ。敵軍は手に手に、爆弾を持つて、奪はれた處の鐵道線路を奪還しようとして、盛り返へして來たのであるが、我が軍の勇壯なる將卒は、ものともせず、勇氣百倍し向ひ打つて大いに戦つた。

その時に於ての我が津永少尉は、此の線路に折り敷いて、盛んに投ずる爆弾を冷ややかに眺め乍ら、刻々に齎らして來る報告を詳細に、落ちつき拂つて聞いて居たが、何處か引きしまつた顔

面には、覺悟の臍が決められてゐるらしかつた。聽て少尉は立ち上らうとする一刹那、否一瞬間に、敵の放つた一弾はヒュツと飛び來たり、あなやといふ間に少尉の軍刀に命中して、鯉口を碎き、鎧を粉碎し、その上に、その破片の一片は、飛んで少尉の左股を貫通し、他の一片は散じて、同時に右の前頭部をいたく傷つけたのであつた。

「ア、ツ……………」

と叫んで、そこに倒れた少尉は、直ちに起き上つたが、然しどうしても、歩く事が出来なかつた。斯の有様を眺めた中隊長は、津永少尉の傍に馳せ寄つて、

「何うした、やられたな。」と聲を張り上げて、

「津永、どうしたんだ、とう／＼やられたのか、何處をやられたな。」

と見れば、前頭部から流れる血汐は、右頬から頸部へかけて、紅を漂はせた。少尉は案外平氣な容をして、

「はイツ、少々やられました、なアにこれ位何んでもありません。この儘にして二三日放つて置けば直ぐ癒ります。此の通りです。」

勢ひ込んで立ち上らうとしたが、左足は一寸も動きさうもなかつた。







事も豫想外に早やく出来上つたが、然し此の塹壕を穿つてゐる間とても、敵の妨害が絶えず續いてゐる爲めに、我が軍も惜しいかな死傷者が次ぎから次へと續出して、我等が同胞は情なくも永久に地下に眠つて行くのであつた。

味方の軍が一切の準備を調べて、攻撃開始の命令を今か今かと待つてゐる中に、敵もさるもの防禦工事を造つた。そしてその前面に張られた鐵條網をしかも二重に張り廻はし、その中間を縫ふ様にして、立派な大きい塹壕を穿つて、我が軍の行動を妨げ様としてゐる工事が立派に出来上つて了つてゐるのであつた。此の働らきは敵乍ら實に鮮やかなもので、賞讃の辭を捧ぐるには充分であつた。

此の有様を眺め知つた中隊長山田大尉は、

「露奴、素早やい事をやつたわい。」

と誰に云ふともなく、見事に出来上つた前面の塹壕を睨んだ。此の時早やくも、既に原隊へ戻つて居た津永少尉は傍にあつて、之も双眼鏡を當て、敵の陣地を凝視してゐた。そして靜かに如何にも落ちついた態度で、山田大尉を振り仰いで、

「中隊長殿、あそこに張つてある鐵條網には、必らず電流が通じてゐると思ふのですが、鐵條網

を破壊する前に、先づ敵の塹壕を奪はねばならぬと思ひますが、どうでありませうか。」

其處に居並ぶ下士卒の面々は如何にも心配らしく、

「矢張り津永少尉殿のお仰る様に、鐵條網切斷の前に、必ず敵の塹壕を奪はなければなりません。それに電流の通じてゐる事は慥かであります。つい一寸前に斥候に行つた、清水上等兵は、その電流に感電したとの事で實に危険なものであります。中隊長殿のお考へは如何なものでありませう。」

と津永少尉の率ゐてゐる太田と云ふ一下士も語を次いだ。

これを聞き終つた山田大尉は、

「ウム吾輩もさうは思つてゐた。敵にあの塹壕を長い間保守される事になると、吾が軍の目的は全然達せられぬ事になるから、先づ第一に君等の言つた様に、第一の手段として敵の塹壕を奪略するのが最も急務だらう。」

と云つてまた、

「どうか皆んなしつかりやつて呉れ、吾々の力の及ぶ限り、倒れて後已むの勢ひで。」と呵々と笑つて、溫和な顔にニコ／＼と笑を浮かべて、諸士卒を勵ますのであつた。



この時津永少尉は、

「中隊長殿、あんな事は何でもなし仕事であります、あんなものは、一舉に攻略てしまひたいものと思ひますから、塹壕奪略の命令は、小官にお願いしたうあります。」

「然しさう軽々と物事は行くものではないよ、え、津永どう思ふ。」

「いゝえそれでも大丈夫です。」

「我輩も君ならば大丈夫だと思つて居るが、然し、こんな場合に遭遇した時には時期が最も肝要なのだ、それだから暫く時期を見様ぢやないか。」

「なあに、彼れしきの塹壕を奪略するに、何の手間がかゝるものですか、不肖此の津永が身命にかけても、直ちに奪略いたします。」

それと同時に、また津永少尉の部下であつた清水軍曹は、

「中隊長殿、此の命令は我が津永少尉殿に御願いたします。」

と、いんと決死の色が顔面に溢れてゐるのであつた。これを聞いてゐた、津永少尉の部下は皆異口同音に、

「中隊長殿、我が津永少尉殿に御願いたします。」とて殆んど全部は何事かを其の胸奥に秘めてゐ

るらしく、決死の色は顔面に、むしろ俵疹を思はせる程に蒼ざめて、殺氣立つて居た。

先きより黙つて此の有様を見て居た山田中隊長は、やがて莞爾として微笑を浮かべ、

「ウム勇ましい言葉ぢや。」

と只一言いつた。これを聞いた津永少尉初め、部下の面々は只嬉しさに雀踊する許りであつた。

### 無念や逆襲

— 我は強襲又強襲 —

少壯の勇士我が津永少尉は、選り抜いた精銳の若干の部下を引率して、二十七日は午後一時を一寸過ぎた頃、第四塹壕から躍出すると、驀しぐらに敵の塹壕目がけて、猛虎の如く狂ひ立つて目標にと突進した。此の有様を悟り知つた敵の軍は、突撃隊を目がけて一散に砲火を浴せかけた。砲煙はまうくと天を衝き、砲音は天地をゆるがせた。我が精銳の兵卒も、無念や先頭の者よりバタ／＼と、將棋倒しに斃れてしまつた。こんな事はかねての覺悟であるから、何のひるむ處もなく、暗れる味方を飛び越え、飛び越えて、無二、無三に突き進んで、漸やくに塹壕近くまで肉迫して行つた。



「突つこめ。」

と砲彈雨の中にあつて、天地に轟く大音を擧げた津永少尉は、軍刀を右手に閃めかして勇み立ち、阿修羅の様に、壕内に飛び込み、あたるを幸ひと、獅子奮迅に駆け巡るのであつた。續く部下も我劣らじと猛り立ち、此處に組み打ち、彼處に倒れ、處かまはず、撲り合ひを初めたが、斯の様な接戦、否肉迫戦に至ると、敵は到底我が精銳の敵ではない、瞬く間に追拂はれた敵兵は塹壕から逃げ上つては、直ちに狙撃さるゝと思つたか、總て下壕の中を右へ〜と逃げ去つた。此の塹壕奪略戦に突入りつてからの味方の負傷者は僅かに四五名で、少尉は奮戦したにもかかはらず、いさゝかの微傷をも負はなかつたのである。

かくして此の難攻の塹壕全部は確實に、我が軍の手に歸有したのであるが、敵の逆襲に具へる爲めに、味方の第四陣地までの通路を開き、他の一方は占領した塹壕の兩端も、分厚の鐵板で塞いだ。それは言はずとも知れた河の水を防ぐと同様の考へで、鐵板を以つて、敵の逆襲を防がうとしたのであると、後から考へれば、實に愚にもつかぬ馬鹿氣な真似をしたものだ、何れも腹をかゝへてをかしさを禁ずる事が出来なかつた。

夜に至ると敵は果せる哉、猛烈な勢ひで、逆襲をし初めた。そして考へに考へぬいて拵へた、

此の鐵板防禦は、瓦礫に等しく何の効をも奏する事が出来なかつた。逆襲して來た敵は、何れも皆、爆薬を手にして居るものか、それを一團にしては、壕内を目がけて、投込むのであつた。味方は今は詮方なくもそれを避くる爲めに一步を退けば、その爆煙の消えやらぬ中に、またも更に他の爆弾を浴せかけるのであつた。これには流石我が勇壯の津永少尉を初め、選りに選つた我が兵卒も聊か困憊を覚え閉口の體であつた。何しろ爆音は轟々と天地をゆるがし、砲煙は四邊を籠め、四吠を辨ぜぬ有様で、顔、形は砲煙に閉ざされて誰れの容と定かの見分けすることすらつかない處へ以つて來て、これを防ぐ味方の武器としては残念ながら貧弱極まる小銃をしか手にしてゐないのであつた。

一回二回は我が軍も辛うじて撃退もしたが、續いて三回四回と根氣よく、繰り返へして迫る敵の逆襲の爲めには、味方の小隊長は惜しいかな二人までも倒れ、下士兵卒の死傷は續々として出るので、一旦は占領した此の塹壕は、またも遺憾ながら、再び敵軍の手に奪還され、味方はいたし方なく元の第四陣地へ引き退り、再撃襲を謀るべく其の準備に取りかゝらなければならなかつたのであつた。

塹壕奪略の計畫が失敗に終つて、全總攻撃に一頓挫を來たした、我が軍の後方部隊ではじつと



しておられなくなつたから、一舉に攻撃を開始する事になつた。

そして、

「山田中隊は強襲して、明早朝を期し、松樹山砲臺の外岸を占領すべし。」

との命令が、下つた。此の命令を受けとつたのは、丁度二十九日の午後であつた、中隊長は下士兵卒に最後下将卒も、余と共に、君國の爲め一身を犠牲にして、奮闘しなくてはならぬ。



中隊長の訓示

の隙を固めさすべく、出發に際して、次の如く一場の訓示をなした。

「我が中隊は、命を受けて、松樹山砲臺の外岸を攻略する事になつた。我が中隊の進退は全軍の行動に對して、大なる結果を及ぼすものであるから、汝等部

勿論充分に防禦工事を施してある處、向ふのであるから、萬死を怖れず、その任務を全うするのが、我等軍籍に身を置いたものゝ義務である。今戦ひの模様を考ふるに、後方に退いてゐても、又、前方に進んでゐても敵の着弾圏内にある以上は、何れも同一であるのだから決して怖れはせぬであらうけれど。死と云ふ運命は恐れる程より以上に力強く襲ふて来るものであるから。我が中隊は、今や全軍の先頭に立つて、敵壘に肉迫するのである、故に軍籍に身を置いた吾々軍人としては、最も好個な死場所なのだ。此死所は再び求めても、容易に得らるべきものでない。今や我々が日頃願つてゐた、此の一戦こそ、吾が中隊の生涯の面目、死ねば思ひ出となる戦ひなのである。」

中隊長はこゝで一層語氣を強よく一層聲を張り上げてまた言葉を續いだ、

「汝等も軍人である、吾も軍人である。軍人たるものは充分に覺悟して、よくその任務を完うすべきが任務で、しかも重大な任務なのだ、汝等もゆめ／＼それを忘れる様な事が萬一にもなからうが、決して忘れてはならない終り。」

と、その一言一言には萬死を決したるものゝ如く、顔面の筋肉は一語毎に強よく引きしまつて行くのを見受ける事が出来た。これを聞いてゐた將士も一同顔を見合はせ、決死の色を面に現はし



て互に、手と手をかたく握りしめて、勇ましく華々しく陣頭に立つて、憎さも憎い敵を片つばしからやつつけて、吾々は日頃の本懐を達しようなどとあちらにも、こちらにもそれらの言語が相錯互して聞こえるのであつた。

只々感謝の外言葉はない

—互に酌み交す別れの盃—

いよく明くれば早朝から、突撃をすると云ふので、山田中隊全員の士氣はいやが上にも揚つた、隊からは、俵給等も繰り上げて、其日直ちに渡されたのであつた。多くの將士は嬉ろこび勇んで、

「一つ我々は激戦の前に、今日頂いた俵給で祝盃を擧げ而して華々しく敵陣に乗り入らうぢやないかね、君等はどう考へてゐる。」

「それは大いに賛成だ一つやらう。」

「それは面白い、吾々は二度と歸へる事が出来ないのだ、華々しくやれ。」

「全くさうだ、吾々は二度と歸へる事は出来ない、二度歸へる事の出来ない我々が、今日繰り上

げてまでも頂いた、この貴重な俵給をどうして君、あの憎くらしい敵等に、おめく／＼とられてたまるものか。」

「さうだとも、さうだとも、同感々々。」

「それなら吾々は大いにやらう、愉快にやらう。」

「ブラボー。」の聲も勇しく少壯の勇士等は盛んに氣焔を擧げてゐるが、一方或る兵士の如きは、遠く離れた此の土地において、自分は嬉しい事には、此の一戦に於いて戦死を遂げる、此戦ひに戦死は名譽であると喜び勇んでゐるものもある。

かゝる間にあつても、津永少尉は心の中で、何にか、大いに決するところあるものゝ如く、秘かに最後の臍をかためた。そして前回の塹壕奪略戦の失敗は眼前にあり／＼と迫つて來たのである。さうだ／＼、逆襲によつて奪還された、前回の失敗を補ひ返すのは明朝である。

一死以てよく此の恥を雪がうと、心中深く／＼決したのであつた。

すると、

「おい津永貴様何を考へてゐるのか。」



んにも答へず、前方に長蛇の如く横はる松樹山の砲臺をわき目もふらずに、凝視して身動きもせぬのであつた。

吉田少尉は少し氣にかゝつたものか、

「おい津永貴様、何時まで何を考へてゐるのだ、どうかしたと云ふのか、エ、。」

今度は前へ廻つて少尉の顔をじつと睨めた、

「何あにあまり癪だからどうしてやらうかと思つて、さつきから思案に暮れてゐる處さ。」

「何が癪にさはつたんだ、津永。」

「いやそんな事はなんでもないんだが。」

「何んでもないつて、貴様、中隊長に何にか言はれたのぢやないか。」

同僚の吉田少尉は全く感違ひをしてゐるのである。

「いや中隊長ではない、敵に塹壕を奪還されたのは、實に口惜しくつてたまらないのだ。」

「ウム、何んだと思つてゐたら、その事か、それなら貴様俺だつて同感さ、然し津永、その仇討ちならば、今眼前に迫つてゐるぢやないか、大いにやらなけりやならない譯だな。」

「勿論だ貴様もしつかりやつて呉れ。」

「なあにそんな事は大丈夫だ。」

と云つた吉田少尉はまた言葉をついで、

「なあ津永、幸ひに俸給も渡つてゐるから、一つ時間を利用して、華々しく大いに別盃を挙げ様ぢやないか。」

「よしそれが良からう。」

親しい同志の二人は、互ひに愉快さうに肩を並べて、所屬部隊へ歸ると、其處には下士將卒の隔てなく、飲み且つ談じて、目前に横はる死生の境をも知らぬ有様である。

津永少尉と吉田少尉とは盛んに飲んだ、其の隣りに座つて飲んでゐた二人の兵士も何處か死を決した様に、

「愈々明日は死ぬんだから、今の中に充分に腹を充たして置かうぢやないか、なあ田村。」

田村と呼ばれた軍曹は一同を見渡して、

「俺はこゝに十圓の現金をもつてゐるんだ、これは俺の肌付だから、若し俺が先きに死んだら、生残つた君等全部で此の金を取つて、心よく一杯飲んで呉れ、そして華々しく勇氣を出して戦死して呉れ、決して此の金は、どんな事があつても、敵の手に渡すと云ふ様な事はして呉れるな。」



一同は皆、

「田村貴様、何を弱い事を言ふのだ死ぬなんて、もつとしつかりしなくつちや駄目ぢやないか、貴様は弱い奴だな。」

「何弱い奴だつて何を言つて居るんだ、俺が名譽の戦死をするからつて弱い事も何もないして呉れ、それよりも、まだ時間があることだから、愉快に飲もう〜。飲んで然して慥らかう



兩少尉の別盃

\* ぢやないか、戦死は軍人の本望ぢやないか、野たれ死と違つて、軍人の本望をとぐるに、何にが弱い處があるんだ。何處に恥しい處があるんだ、エ、さうぢやないか。」

「田村貴様怒つてゐるのか、俺等が悪かつたのだから、勘忍んで然して慥らかう

働らいて戦死しよう。」

こんないさましい話はあとから後へと續いて、皆んな萬死を決した如く盛んに飲み、且つ談じてゐた。

後方にあつて此の談話を聞くともなく聞いてゐた、津永少尉の眼からは熱い熱い涙がはら〜と流れ落ちたのであつた。

「田村軍曹、よく言つて呉れた、俺は實に嬉しい、此の上もなく嬉しいのだ、一同のものもかくまでに覺悟をしてゐるか、此の話を中隊長殿が聞かれたら、どの位満足されるか知れない、僕は此の有様を詳しく中隊長殿に報告する義務がある。」

「こんな事を中隊長殿に報告されては……津永少尉殿。」

と田村軍曹は云つたが、田村軍曹の言葉に耳をもかさず、恐縮してゐる一同を残して少尉は中隊長の許に走つた。

「中隊長殿一寸申し上げたい事があります。」

「やあ誰かと思つたら津永君か、何か變つた事でも起つたのか。」  
來たるべき戦鬪の豫想を胸に浮かべてゐた中隊長は、靜かに振り返つて尋ねた。津永少尉は謹



嚴な態度を持して、此の物語をありのまゝ告げ、  
 「明朝の戦闘には、我等將卒が命のあらん限り、誓つて目的を決行せずには居られません。必ず決行いたします。」  
 と附け加へた。此の話をじつと無言の儘聞いてゐた中隊長は、矢庭に少尉の手を固く握り、目に感謝の涙を浮かべて、

「津永君よ、俺はこれ程に満足した事は今迄に未だ一度もなかつた。津永君、中隊長は改めて、皆んなに感謝するの外はないと傳へて呉れ給へ。」

### 嬉しや偵察隊の鐵條網破壊

——死を決せし田村軍曹、青木伍長——

明くれば、まだうすら寒い、三十日の朝まだき、我が忠勇なる精銳は、あやめも分かぬ、曉の闇を縫ふて、再び塹壕へ肉迫した。全軍は肅々として、敵軍から射出す探照燈の光を避け、匍匐しながら、進んだので、幸ひにも、塹壕近くまで達する事が出来た。時々探りに放つ敵の彈丸は、いづれも物音すこく、頭上をかすめて、あてもなく飛び去つて行くのみである。機は熟せり、時

分は宜しと見てとつた中隊長は、聲勇ましく、

「それ、突ツこめ。」

と命令一下、今まで滿を持してゐた、強弓を、一時に切つて放すが如く、我が將卒は猛然として、敵の塹壕に躍り込み、手當り次第に切り倒し、撲りつけた。不意を食つた敵は、恰もくもの子を散らすが如く、暗を衝いて右往左往に逃げ去つた爲め、味方の軍は易々と、何の苦もなく、再び塹壕を奪還し、勝利を得る事が出来る様になつたのであつた。一同の將士の嬉びはこれ以上はなかつた。

やうやくに明けはなれた薄明りに仰ぎ見る松樹山砲臺、その外岸までは此の壕を距る約百五十メートルで、鐵條網は二重三重に取り廻はされてあつて、外岸の幅は幾何、深さは何程、唯見る砲臺の麓から、流れ出てゐるばかりで、何處をどう攻め初めてよいのか、薩張り見當がつかないものであつた。そこで此の鐵條網を破るものと、外岸の状態を偵察するものと二組を選抜するのやむなきに至つたのであつた。

其の折鐵條網を破壊する選に入つたものは田村軍曹で、偵察組の選に入つたものは青木伍長であつた。



そして、若干とも双方の部下を引率して、日暮を待つて出發する手筈とはなつたのである。これ等の選抜された勇士の面々は、何れも豪膽揃ひで、中でも、偵察組は鐵條網の後方から續いたので、物音や、氣配によつて、敵に悟られると云ふ怖れがあつたからで、先き立ちになつて飛び出し、何れも瞬く間に、突き進んだ。

鐵條網の方では、田村軍曹と、長妻一等卒とが、互ひに先を争ふ様にして前進し、その他の勇士も、負けず、劣らずこれに續いた。やがて一同が鐵條網の近かくまで進むと、果して敵が発見して、探り打ちに暗中を亂射し始めた。その中を最も沈着の態度を取り、砲臺の前面に涉つて、正に五メートルを破壊し、かねて與へられてゐた、ハンカチーフを切斷した兩端の柱へ、目標に結びつけて歸へつた。

偵察隊は更らに、更らに此の上もない危険を冒して、外岸附近にまで近づき、腹匍ひをしながら、四邊に注意をして見廻し、各自に手分けをして、外岸内を覗いて見た。それは恰も長蛇の鎌首を上げる様にして、覗き下ろすと、直ぐ下から敵が誰可するので最も危険な事なのである。周て、首を引き込ませる、そして暫時は氣配を覗つてまたのぞくと、また誰可されるのであつた。あまり再三重ねると、いきほひ氣附かれるので、いい加減に見限りをつけて、其處を直ちに引き

上げて歸陣したが、此の數分間に於ける偵察隊の働らきは、我が軍隊の大活動に、大なる照明を與へたのであつた。

即ち外岸の幅は少くとも七メートルを下らず、深さに於ても大體同じく七メートル、その中間に一條の暗の逃げ路があつて、これも約三メートルの下になつてゐると云ふ事が判明したのである。故に飛び下りると云ふ譯に行かぬから、いざ突撃と云ふ場合には、他の方法を取らねばならぬ事が判然したのだ。然かも闇路を縫ふ迷路には各々四個づつの窓があつて、外岸と外壁にも各各四個づつの窓が穿たれてゐて、その形状は穹窿をなしてゐるのであつた。

然しながら兵數は幾許か判明せぬが、兎に角相當の兵數を具備し、尙ほ闇路の傍には、星明りにも、池の様に思はれる處の水たまりがあるのであると云ふやうに臆氣ながらも、大體の様子の偵察が終つたのであつた。

翌朝になつて、はるか前方を眺むれば、白い印の附いた柱が二本、その中間の鐵條網は、物の見事に切斷されてあつた。

もし我が忠勇なる軍の突撃を、助けたものは誰れかと尋ねる者があつたなら、それは言はずと知れた、此の沈着にして且つ忠實に自己の任務を果たし得た、二組の選抜隊が苦心の賜であると、



容易に斷言し得られるのである。

此の二組の選抜隊の働らきは、實に鬼神の如く素早やく、松樹山 攻略の大偉勳者であると云ふ事を言ひ得らるゝのである。

かくして敵陣地の實情も、火を見るよりも明らかとなり、遂に鐵條網も思ひの通り破壊さるゝに至つたのである。それでもいざ我が軍隊が突撃となつて、最初の一隊が内壁に攀ち登つたと同時に、後方部隊は、直ちに續くべしとの手筈を定めて、愈々大運動を開始したのは、その日の午後四時過ぎ頃からであつた。

戦闘開始の約一時間前位からは、味方の砲兵隊は、一齊に砲門を開いて、突撃隊の運動を助ける様な手筈が出来てゐたのであつた。突撃隊は全軍鳴りを沈めて機熟するを待つて居ると云ふ有様なのであつた。

實に殺氣漲つて、全軍の意氣や大河を呑まんとするの概があつた。

殘念！ 無念！

——必死を期せし最後の雄々しさよ——

先頭に立つたのは、眞岡少尉の率ゆる一個小隊で、これに屬する工兵の一個小隊は、中山少尉の指揮によつて、壕内へ盛んに爆彈を投じてゐるのであるが、後續部隊からこの有様を展望すれば、その割合に、あまり効果を奏せぬらしく思はれたのであつた。先頭の兵士は少しく内壁に肉迫せぬと、此處でグヅ／＼してゐては、全軍に影響する事大なるものであるからして、後方にあつて此の有様を見て取つた中隊長は、命令を下して無二、無三に進撃した。果せるかな敵彈は當面の松樹山からのみではなかつたのである。二龍山、案子山の各砲臺からも、盛んに彈丸を我が軍に對して浴せかけてゐるのであつた。一步に機關銃彈、二歩に重砲彈が、破裂する、倒れる、兵を吹き飛ばす、土を刎ね上げる、彈丸は雨の如く盛んに降り來つて、面を向ける術もないとは實に此の間の光景をいつたものであらう。前夜破壊しておいた鐵條網の邊りには、それと覺しき味方の兵士が、動きもやらず、折り重つてゐる。丁度身體鼓谷まつて、進む事も出来ず、退く事も出来ずと云つた風に、何れも敢へない最後を遂げてうち臥してゐる。否これは徒たづらに、打ち臥してゐるのでもなければ、寝そべつてゐるのでもない。此の様に折り重つて打ち伏してゐるのは、我等の同胞——續出した味方の死傷者がたふれてゐるのである。之れ皆我が帝國の犠牲者なのだ。



外岸に近い方面はと見れば、爰はまた一層の混雑で、かね二期してゐた事ではあるが、七メートルもある塹壕であるから、飛び越す事等は、とても思ひもつかない難事であつて否不可能な事である。間路の上は五メートルもあるのであるから、これまた如何する事も出来ないのである。其の中には一人斃れ



後最の尉少永津

も、此の塹壕を越えなければ、今までの苦心は水泡に歸するのである。とは言ひどうして此塹壕を越したものであらうか。なアにどうしても塹壕を飛び越して見せてやる、にくさも憎いはロス

の奴である、と彈雨の中を物ともせず、何處、其處となく駆け廻つてゐたが、と見る外岸の右手の屈曲した邊に、聊かながら、我が砲撃の爲めに、崩れた箇所を見出したので、少尉はつかつかとそこに駆け寄り、

「繩だ、繩だ。」

と連呼しながら、一條の綱を傳はつて、スル／＼と壕内へ二メートルも下つたかと思ふ時分、敵の打ち出した一彈は、飛び來たつて、無念や少尉の頭部を貫通した。それと見た部下の兵卒が、直ちに引き上げたが、少尉は流るゝ血潮を事ともせず、只、

「残念、無念。」

と云ひ乍ら、其の場へバツタリと倒れた。部下は直ぐに後方へ送るべく抱き起せば、血走る兩眼に、敵陣を睨んで、軍刀を杖に踏跟きながら、二三步出ては、またバツタリ倒れる。此の體を眺めた中隊長は、

「津永少尉とう／＼やられたか、どれ／＼傷は浅いぞ、確つかりしなきやいかん。」

「いや中隊長殿、これ位の事は何んでもないです。」



といつたが、殆んど蟲の息、少尉をいだいた、中隊長の軍服は、親愛なる味方の血潮でベツタリと濡れた。中隊長は直ぐに、後方の野戦病院に送るべき事を部下に命じて、二三歩退くと、今まで蟲の息であつた、少尉はカツと兩眼を見開いて、

「中隊長殿ッ、さ………残念………です、さ………残念でたまらないのです……。」  
 言ふ言葉も早や四苦八苦の有様、中隊長は又もや少尉の傍に寄つて、聲を勵まして、  
 「津永少尉、仇は取つてやるぞ、何か言ふ事はないか。」

「た………たつたひ………とこと言………」

その言葉は實に苦痛さうであつた。その場に居合はせた、面々は皆軍服の袖をぬらさぬものはなかつた。それは實に悲愴の極みだつた。

「ウム、何か言ひ残したいか。」

「ハイ………占領を見ず………に、し………死ぬのが、如何にも、ザ………残念でな………りません、中隊長殿、こ………これ丈けを記憶してゐて………ください。」

「津永少尉、實に勇さましい言葉だぞ、俺は………俺は、命のあらん限り、君の今生の言葉は決して忘れんぞッ。」

中隊長は少尉の耳に口を押し當て、聲を殊更らに大きくして言つた。躰て少尉は、微かに笑んだと思つたが、

「何にッ………くそッ。」

身を起しかけた矢庭に鳴りを生じて、飛び來たつた一弾は、またもや少尉の頭部を深く貫ぬいたのであつた。行しいかな、此の一弾は細り行く、津永少尉の息を永久に、再び返つて來ない様に、ブツリと切つて終つたのである。

最初の負傷の時と云ひ、今度の出來事と云ひ、津永少尉の意氣は、實に軍人の、否我が大和民族の龜鑑である。

少尉は再び突撃せんとする前夜、一切の所持品を中隊長に托した。その中には一部の手帳があつて、鉛筆の走り書きで、父母、兄弟に宛てた最後の別れを告げる一文が認めてあつた。後日にその文を読んだ中隊長は、少尉の必死を期したる、その雄々しい心がけに泣かされたと云ふことである。

其の後幾回かの突撃を試みて、少尉が、  
 「占領を見ずに死ぬのが残念だ。」



と遺言した外岸も精銳なるわが軍の奪還する處となり、延いては松樹山も陥つて仕舞つた。しかも勇ましく、且つ壯烈な最後をとげた津永少尉の靈も以て瞑するであらう。

# 常陸丸

## 玄海洋上千載の恨事

——忘れ得ぬ悲しき記憶——

心筑紫の島離れ、玄海洋のただ中を、吹く汐風に日の丸の、旗ひるがへす常陸丸、佐渡も續いて進み行く、船路の果は白浪の、よるべや如何に遠からむ、何を荒ぶる荒浪の、逆巻く中の黒煙り、ただ一筋に走り来て、我を取巻く敵の艦、こは何事と云ふ間なく、亂射亂撃雨あられ、進み通れむ隙もなし、千里を走る猛獸も、水に入りては如何にせむ、萬里を翔くる大鷲も、浪には翼折れぬべし。

心ばかりは逸れども、運送船の悲しさは、進退ここに谷まりて、詮方なくも敵艦に、委せ果てしぞ是非もなき、佐渡は如何にと眺むれば、霧に隔たり分からねど、同じ様なる運の末、輸送指揮官須知中佐、是れまでなりと思ひけむ、大久保少尉の捧げたる、聯隊旗をば手に受けて



都の方を伏し拜み、火を放ちてぞ焼きければ、各將校もとりどりに、貴重品の焼き捨てぬ。此有様を打ち見つつ、中佐は軍刀抜き放ち、無念の涙はらはらと、落つるを袖に打ちはらひ、萬歳唱へ悠々と、腹掻き切つてぞ失せにける。列なる將校を始めとし、下士、兵卒に至るまで同じ枕に伏すもあり、海に投じて死すもあり。

敵弾ます／＼加はれば、甲板上は忽ちに、屍の山を築きつつ、流るる血潮に玄海の、浪は朱にぞ染みにける。哀れ果敢なき常陸丸、君萬歳の聲細く、我が忠勇の將士等が、無限の恨打ちのせて潮の泡と消えにしは、明治三十より七年の、水無月中旬の暮つ方、夕日は浪に落ちされど霧たち覆ふ海原は、黒白も分かぬばかりなり。

實に忠烈の丈夫が、十年の間朝夕に、磨き鍛へし日本刀、試さむ敵を前に見て、遺恨の刃一太刀も、報ひむことも泣くばかり、駒の蹄に満洲を、踏み躪らむも夢なれや、ウラル、バイカル、打ち越えむ、あらし事も幻か、思へば無念の極みなり。嗚呼一聯隊の我が勇士、水漬く屍と消えしかど、國に殉せし丈夫が、清きその名は萬世も、響の灘に立つ波の、絶ゆる時なく仰がれむ末まで遠く流るらん。(琵琶歌——常陸丸)

之はこれ、明治三十七年六月十五日午後零時、音にきく高浪荒き玄海洋の潮のも屑と消えてし

まつた、常陸丸の臨終を書いた琵琶歌である。稍々ともすると健忘症になり易い多血質の日本人には、も早此悲しい記憶を失つた者があるかも知れない、だがこれは忘れてならない出来事の一つである。削り去ることの出来ない記録の一節である。そして當時の國民が如何にこの出来事に刺激されたか、奮起させられたか、又それに俱つてどう云ふ不しあはせ者が出来たかを、此處に改めて説かうと思ふのである。

### 常陸丸佐渡丸字品を發す

——土産はどつさり敵の首——

黄昏近い港には、灯さぬ船灯した船が、入交つて小山のやうに横はつてゐる。その櫓の数あること、林のやうだとも言はうか、その中に出帆準備を急ぐ二隻の汽船があつた。

即ち運送船常陸丸、佐渡丸がそれである。

「愈々本土の土も踏み收めだ、今度歸つて来る時は、白い小箱の中に骨となつてゐるだらう。」

「生きちやあ歸られまい。」

「もちろんだ、だが僕はね、戦地の活劇を想像すると胸が躍つてならない。」



「それは僕だつて同じことだ、頑強な敵を退けて砲壘でも奪つたら本統に痛快だらうなあ。」  
 「それは屹度ね、だが然し、花々しい戦をしないで死んでしまつたり、又は手柄をしないで凱旋したりするのはまつたく詰らない気がするだらうと思ふよ。君の言ふやうに、敵壘でも攻撃して成功したらどんなにか嬉しからう。」

「未だ戦争は始めだから、我々の合戦場が無くなりもすまい。さうだな、旅順を陥し滿洲を馬足に掛けて一思ひにシベリヤからウラルを越えてモスクワあたりまで侵入し、敵の膽つ玉を冷々させてやりたいものだ。」

「面白い、本統にその元気で戦争をして呉れ給へ。まさか歐露に入つてから講和でもあるまいがまあまあ滿洲だけからは敵を追拂はなければならん。考へて見よ、僕たちの十年以前の軍人は、あの遼東に徒死をしまつたのだ。今でも白骨を晒して泣いてゐるだらう。その敵、三國干涉の張本である露西亞を討つて、地下の同胞の恨みを晴らしてやるのが僕たちの任務だ、義務だ。」

「胸が踊るよ、血が沸くよ。早く滿洲へ行きたいと思ふ。」  
 故郷を出發する時妻子と水盃を交し、萬歳に送られて勇み悦んで征露の旅に上る軍さ人の間には、斯うした會話が交されるのであつた。戦地に行けば兎も角、今はさぞ戦場の空が戀しく、

待遠しいことであらう。

六月十四日午後六時、靜かな宇品港の夕霧を頼はせて、出帆の鐘が鳴り、汽笛が響いて、常陸佐渡の兩船は徐ろに内海の波を蹴つて出發したのであつた。

舷側には轟々と碎けて行く波の音が立つて、聽て來るべき戦ひの如何に勇壯ならんかを想ふ。纏の夢を、温かい夢を、守つてゐるのであつた。夢は何處を、何を想つたであらう、滿洲の平野、高黎畑、支那人、戦争、突貫、夜襲、然し恐らく神ならぬ身の、明日の慘劇が突如と一行に降りかゝらうことなど、夢の中にも想ひはしなかつたであらう。

常陸丸には、近衛歩兵一聯隊本部及び同じく第二大隊——第八中隊缺員——と第十師團姫路の糧食縦列とが乗組み、近衛歩兵後備聯隊長陸軍歩兵中佐須知源次郎が輸送指揮官として司令を司つてゐたのである。

「上陸地點は何處だらう。」

「鴨綠江岸だらう。」

「遼東半島の一角にちがひな。」

「それは判るものか、だがどつちにしろ敵の澤山居さうな所なら良いね。」



「さうだとも、男子に生れた上からは、目に餘る大敵を相手にして、花々しい討死を遂げて、君恩の萬分の一でも報いたいものだ。」

「同感、同感、紅毛ロスキー何ぞ恐るべきやあだわい。」

「痛快だね、ところで君は宇品の叔母さんなる者に會つて來たさうだね。」

「ああ、會つて來たよ。」

「土産を呉れつて言つたらう。」

「うん、だから俺は土産にはロスキーの生首を二三十持つて歸らうと云つたら、まあ生首なんか持ち込まれちやたまりつこない、生首よりは立派な働きをして歸るか、それとも自分の骨を土産に呉れと云つてゐたよ、感心だらう、スパルタ式だね。そしてこんな歌を書いて呉れたよ。」

「見せて呉れ、何々、」

かへらじと誓ふ心の梓弓

戦の庭は如何に憂しとも

なるほどね、あんまり旨くはないが、眞情流露と云ふところだ。」

「どれ乃公にも見せる、なるほど巧みな筆蹟だね、何流と云ふのか知らないが、乃公の家内の金

釘流よりは大分鮮かだ。」

「良い氣なもんだ、金釘流なんかと比較する奴もないもんだ。この布は羽二重だね、二羽重は柔くて文字が浮き出たやうに感じられる。殊に斯うして良い筆蹟で和歌なんかを書いたのは雅致があつてすてきなもんだ。」

「ああもう澤山だ、大事な記念品に指の跡なんぞ附けちやあ良げないよ、俺はこれをお守り袋に入れて置くんのだ。」

「然うして置くが良い、まつたく良い記念だよ、俺にはそんな心懸の良い叔母さんもないが、出發の時にうれしかつた事が二つあるね。」

「何だ。」

「親爺が出發の日に香取鹿島様のお守りを呉れて、お母がそれを金欄の袋に入れて呉れたことよ、小學生が萬歳を唱へて呉れたことだ。」

「それは僕も忘れない、汽車の窓から見送りの人たちや小學生に擧手の禮をすると、皆がいつしよに國旗を手に振つて眞心から出征を祝つてくれたのは嬉しかつた。萬歳をきくと總身の血が胸に溢れて、御國と大君のために全身を抛つて戦ひたくなるよ。」



「同感々々、萬歳ほど悲壯で人を動かし易いものはないね、僕は我が國の軍人の戰鬥が勇敢であるのは、一つは萬歳の力であると思ふ。或人たちに言はせると、萬歳はバンザイで尻が下るからいけない、それよりは彌榮はイヤサツカアエで尻が上るから良いと云ふけれども、イヤサツカアエは聲が釣つて空に消えてしまふやうで後に力がなくなるそれに引替へてバンザイは聲が落ちて、後にガツシリと力が籠るから如何にも勇ましいと思ふ。」

「さうだよ。たしかに、イヤツサツカアなんて聲ぢや折角張りつめた氣も、一度に緩んでしまふだらう。」

「萬歳。ああ本統にロスキーに早く出遇つてひと戦さしたいなあ。」

「紅毛人と戦ふのは始めてだ。」

「ロスキーはウラーと云ふつてね。」

「ウラーと云つて突撃するさま、勝鬨を揚げるさまは、敵ながら勇ましいものだと思ふよ。」

「それはさうだらう、彼奴等だつて祖國のために戦つてゐるんだもの。」

引つきりなしに、後から後からと話題が出て船内の夜は賑やかであつた。

「聯隊長殿は知つてゐるだらうね。」

「何をさ？」

「運送船の行先を。」

「そりやあ勿論のことだ。此船の中で此船の行先を知つてゐるのは輸送幹部と幹部船員だけだらう。」

「行く所は、韓山か將た遼東か、我我には想像もつかないよ。何しろ軍機の秘密に屬する\*」

聯隊長殿の、生ひ立ち經歷位知つて置いても良いだらう。」



出征の夜を徹して語る

\*こと  
事だから。」

「聯隊長殿は偉い人物だね。」

「さうだつてね。」

「秀れた所があるよ。」

「俺は聯隊長殿の生立ちを詳しく知つてゐるよ、どうだ我等の上官で且つ屍を滿洲の野に俱に曝さうと云ふ



「生立ち、それは聞きたら。」  
 「是非所望する。」  
 「これは耳よりな話だ。」  
 「では。」と其一卒は姿を改めて、「靜かに聞いて呉れ給へ。斯う云ふ物語だ。」と、徐ろに語り始めたのであつた。

### 須知中佐の生ひ立ち

——軍人志望の少年——

三十五萬五千石の舊城下、因幡(鳥取縣)鳥取市は極めてクラシツクな感じのする、封建時代の面影を止めた町である。袋川と云つて、野村愛正氏の小説「明け行く路」にも鮮細に描かれてある洪水汎濫の多い川が、此どちらかと云へば暗い感じのする町を貫流し、西寄りの所には此國第一の大河千代川の清流が満々と渦をなして流れ、賀露の海にそそいでゐる。  
 鳥取市の背面には、戦國時代の勇壯な物語にも記録されてある久松城がある。城址は僅かに石垣を残し、海拔八百餘尺の山は唯鬱蒼と晝尙暗く樹木が立ち並んでゐるのであつたが、鳥取の子

供たちは、海が遠く川は急流で危険のため、多く此山に登つて一日を楽しく面白く遊び過ごすのであつた。  
 「さあ良いかい、お城址の赤松まで誰が早く走りつくか駆けつけくらをするんだよ、途中で廢したらきかないよ、早く走りついた者が今日の遊戯の總大将だ。」  
 「ちやあ源ちゃん、早く走り着いたら大將になれるんだな、大將の命令は源ちゃんでも聞くんだな。」  
 「ああさうだよ、だが途中で苦しいから廢したなんて弱い事を言つたらきかないよ。」  
 「何あに大丈夫だ。」  
 「云ふもんか苦しいなんて。」  
 「僕だつて云やしないよ。」  
 「苦しいなんて云つちやあ日本男兒が笑はれるからね、僕だつて苦しいなんて途中で休んだりしないよ。」  
 「僕だつて。」  
 「僕だつて。」



源ちゃんと呼ばれた、活潑な少年は、少年仲間で大将株であるらしい。源ちゃんはここにこし  
ながら、

「よろしい、判つた判つた。さあ此處へ一列に並ぶんだ、一足でも前に出ては駄目だよ、そして  
一二三の三の號令で走り出すんだ。それから云つて置くが、途中で友達を蹴飛ばしたり押倒した  
り痛いことをした者は、今日一日僕の從卒になるんだ、從卒は僕の命令をどんなことでもしなけ  
ればならないんだよ。良いか？」

「あゝ解つたよ。」

「では僕は後ろから走るよ、良いか、イチ・ニ、サン。」

七八人の少年は、裾をからげて一目散に駆け出した。路は急な上に狭く、そして木の根や石が  
到るところに突き出てゐるから、それに躓いて轉ぶ者もある。赤土のむき出しになつた坂では  
迂つて二間も後ろへ落ちるものもある。しかし誰も一日中つまらない從卒になるのは厭だから、  
轉んでも迂つても亦勇敢に起き上つて一生懸命、セイセイ息を切りながら一散にお城址の赤松目  
がけて駆け昇るのであつた。

源ちゃんとは見れば、最も後ろから躓かぬ様足もとに注意して悠々と登つて行くのであつた。

赤松が見える様になると、源ちゃんは恐ろしく元氣を出して走り出した。抜かれる、抜かれる  
皆最初から全速力を出してゐるから、足が抜けてしまふやうに弱つて力が抜けてゐる。源ちゃん  
は一人二人三人四人と抜いて行つて、それで息も切らず足も弱らない。もう赤松へ二三間と云ふ  
所で二番目の少年をすつと抜いて、僅か一瞬間の差で一番を抜いて到頭先着になつてしまつた。

「一番だ。」

と源ちゃんは赤松の幹へ片手を懸けて叫んだ。

「ああ、源ちゃんが矢張り一等だ。」

「では約束通り僕が今日の大將だよ。」

「さうだね、おゝい皆早く集まれ、今日の大將も源ちゃんだ、皆来い来い。」

少年たちは息咳きりながら漸く集つて来た。

「途中で廢したり休んだりした者は無いかい、有つたら僕の從卒だよ。」

少年たちは顔を見合せて、

「無。」

と異口同音に言つた。



「よろしい、大將として僕は感心した。戦争でもする時に、一人でも途中で休んだりすると大變戦争に損だつて云ふ事だ。一人の違ひでも千人のちがひと同じなのだ。だから自分で弱つても決して其仲間から外れては駄目だ。一人外れると又一人が外れたくなる、さうすると軍隊は滅茶苦茶に亂れて戦争に負けるどころか戦争も出来なくなるんだ。だから君たちが戦争に出る時は、今の様に自分の弱つた事は打ち捨てて其仲間と一緒にどこ迄も進まなければならぬ。これは大將が君たち兵隊に訓示するのだ。」

「ヒヤヒヤ。」

源ちやんが可愛い顔をし、即座に斯うした要領の良い訓示をするのは、實に美しい一幅の活畫である。源ちやんは斯くの如く活潑でそして伶俐な少年であつた。源ちやんとは誰、既に想像されたであらう如く、我が陸軍歩兵中佐須知源次郎であることは云ふまでもない。

### 傳説湖山池

——湖山長者の權勢太陽を呼び戻す——

鳥取市から西へ一里許り行つた所に、湖山長者の傳説で有名な湖山池がある。湖山池の傳説に

就ては高等女學校の教科書にも現れてゐるが、此處に参考のため其梗概を書いて置けば面白からうと思ふ。

其頃その一面は、數千町歩の大水田であつて、持ち主は海に近い丘の上に、すばらしく宏壯な邸宅を構へ、日本一の富を誇つてゐた湖山長者であつた。湖山長者は多くの近侍を召使ひ、幾百の下男下女を使つて所有する山林田畑を管理し、收穫は年々幾つかの藏を建増さなければ入りきらないくらゐであつた。

湖山長者の生活は近國にも稀な豪奢振りを示してゐたが、でも彼は大變な吝嗇家であつて、その吝嗇家であることも近國に名を得てゐた。

ところが或年の夏の植付けの時、數千町歩の大水田に、例年の如く澤山の人を使つて一日で植付けを仕舞はうとしたのであつた。

けれども、どうしたことか、豫定通り進捗しないで、黄昏が山に圍まれた大平野をだんだん覆つて來たのである。

「これは大變だ。」

湖山長者は、高殿から、未だ植付けを終らない部分の水田が、薄暗がりの中にピカピカと光つ



てゐるのを見て叫んだ。

「諸國にも、俺が一日で此植付けをするのが噂に高いと云ふのに、今年に限つて一日中に仕舞ひきれなかつたと云つては、永年高かつた俺の面目も一遍で丸潰れだ。これはどうしても今日中にやつてしまはなければいけない、だが日は暮れてしまつた。」

長者は困つたと云ふ顔をしてゐたが、ふと何を考へたか、自分の袴の帯から扇を抜き取つて開いた、それは目も眩しいやうに輝く金色の扇で、親骨には金銀の象嵌が入れてあつて、大變美しいものであつた。

「俺は日本一の富者だ、俺は三國にもない金持だ。だから俺の權勢は大變なものであらう。だが俺は今迄自分の權勢が、どんなに偉大なものであるかを目のあたりに見たことはない。俺の權勢がどんな所まで及ぶものかを知つたことはない。俺は然し世の中で困ると云ふ事のあるのを知つた。これを機會に自分の權勢を試して見るのだ。」

湖山長者は、呆氣にとられてゐる侍女に見向きもしないで、金扇をバラバラと繰りひろげ、それを右の手にしつかと捧げて、

「太陽よ、三國一の富者、湖山長者の權勢が汝まで及ぶものならば、もいち度西の山から後へ戻

つて呉れ。そしたら俺はあの残つてゐる水田へ植付けをすることが出来る。」

さう云ひながら金扇で徐ろに、西の山へ落ちて行つた太陽を招いた。と、どうしたことが太陽は再び後へ後へと戻つてまた中空から赫々と地上に光りをそそいだのであつた。湖山長者は踊りあがつて歡喜した。

「さあどうだ、俺の分に仕舞つて、その上毎年ならば種々な道具や稲の苗の餘分を翌日片附けるのであるのを、その



湖山長者が太陽を招き歸す

權勢はこんなもんだ未だ人間で太陽を招き歸したものはない何と偉いだらう。」

誇りげにさう云つて、近侍や侍女を顧みて、笑つたことも無い彼は、まるで嬉しそうに顔を崩して笑つてゐた。

そのお蔭で植付けは念に念を入れて充



日の中に整理して、それで猶且つ日暮れには時間が餘つた。

「湖山長者が太陽を招き歸した。」

と云ふ噂は、ばつとその日に近郷へ廣がつてしまつて、聽ては日本國中に傳はるであらう事を、長者は夢の中の出来事のやうに悦び考へてゐた。

「長者はさすが偉いな。」

「金があるからだね。」

「さうだとも。」

「金は欲しいもんだね。」

「ああ富を積みば人間はどこまでも幸福と云ふ奴が追つかけて来るんだ。」

「金のあるのは運の好い證據だ、俺たちの様な不幸なものには金なんか望まれもしない。」

「長者は良い富を作つてゐるね。」

「さうだよ、太陽でさへ恐れるんだもの。」

「だが然し、太陽がどうして金持の招くのに応じて戻つて來たらうか。」

「それは權勢に恐れてだよ。」

「金と權力は一緒なものか。」

「一緒ではないよ、だけれど金即ち富さへ持てば權勢は得られるものだよ。」

「權勢と云ふものは金で買へるものかい、金で動かされる程危いものかい權勢は。」

「まあ今の世ではね、だが我々貧乏人から考へれば、權力は金より強いものでなければ世の中の人間が幸福ではゐられないね、金は吝嗇をすれば得られるけれど權力は善き人間にだけしか與へられないものでありたい、金で動いたり買はれたりするものでは困ると思ふ。」

「さうであらう、だのにあの空の勇者である太陽が、どうして長者の富に動かされたらう。」

「それは俺のやうな莫迦者には判らない。」

「俺には不思議に思はれる、まつたく奇蹟のやうだと思ふ、いや一層奇蹟だとも考へられる。」

「奇蹟! さうだとも、まつたくの奇蹟にちがひない。しかし何か太陽にも考へがあるのであらうよ。」

「どんな?」

「判らない、判らないけれど何かなければならぬと思ふ。」

「本當にそんなことがあらうか。」



「あるかも知れない。」

「厭な気がするね、しかし金を持つてゐる者は定めし幸福だらう。」

「もちろんだ、今の世ではね。」

「どうして、今の世ではと。」

「でもさうぢやあないか、次の世では今も云ふ通り、権力が金の支配をすることが出来るやうになるかも知れないからさ、金で権勢を動かしたり買つたりすることが出来ないやうになるかも知れないからさ。」

「ああ……。」

「だが、しかし、さうだ今の世では金が欲しいね、せめて長者の半分の富でも持つて見たいものだよ。」

「長者の富の半分は愚かのこと、四分の一も百分の一も君のものになりはしないだらうよ、世の中が貧乏人を何時までも貧乏人で置くやうに出来てゐるんだもの。」

「金持ちにはなりたくないね。」

「さうだ、たしかに、今の世ではね。」

「金が有れば田畑も山林も買へる、小作人も雇はれる、立派な邸も建てられる、逞ましい馬も求められる、そして美しい着物も得られる。」

「は、は、は、だいぶ蟲が良いね、しかし今の世では、そんな望みでは金持ちになれつこないよ。」

「ではどうするのだ。」

「金持になるにはな、食ふものも碌々食はず、襦袢を着、豚小屋のやうな掘立小屋に住み、それでゐて人の三倍も五倍も稼がねばならぬだらう。」

「では、長者の様に豪華な生活をしてゐて貧乏にならぬどころか、一層蔵を増さなければならぬのはどうしたのだ。」

「それは金持が一層富を積む方法だから、俺たちのやうな貧乏人は今も言つたやうな事でもしなければ富者にはなれない。」

「貧乏人はいつたいどうなるのだ。」

「貧乏人か。」

「ああ、俺たち貧乏人は？」

「貧乏人は、一人前の仕事をして相應の生活をしてゐれば良い、さうすれば一層貧乏になつて、



おしまひには飢えて死んでしまふだらう。」

「死んではつまらない。」

「さうよ、死んではつまらない。」

「金持になりたい、若し君が金持になつたら、ずいぶん富を積むだらうねえ。」

「どうして、俺のやうな善人は、よほどの奇蹟で金を得ても、とてもそれを積みあげて行くことは出来ないよ、俺はその金を一人でも多くの人の幸福のために費つてしまふだらう。」

「ではどうなる。」

「善人は今の世では一代貧乏だと云ふことになる。」

「金が欲しいね。」

「それは欲しい、今の世では勤くとも金の有るに越した事はないから。」

「長者は偉いね、金があるからあんな奇蹟さへ現れるのだ。」

「まつたく、しかし太陽にも考へがあるだらう、俺は長者の末路が見えるやうな気がする。」

「そんなことがあらうか。」

「有るかも知れない、無いかも知れない、しかし有つても無くても俺たちはどつちでも良いのだ。」

長者の末路さへ見れば。」

「無かつたらどうする。」

「無くつてもそれで良い、しかし有れば俺は天が未だ墜落しない事を信じる。富で何もが押し通せると思つてゐた長者が、始めて覺めるのを見ることが出来やう、それで、それだけで俺は満足する。」

「何だか厭な気がして来た、そんなことが今夜にもあるかも知れない。」

「……………」

長者の下男の中に、こんな會話を交してゐるものがあるのを、誰も知る者は無かつた。

### 其朝の物語

——長者失望して投身する——

夜の騒ぎは云ふまでもない。

長者は奥の大廣間で近親や侍女を集めて大變な酒宴を開いた。

「俺は人間の誰もが未だやつた事もない大きい仕事をして、俺の權勢が太陽を支配するだけ大き」



いものである事が知れたのだ。汝らも驚いたらう、俺も……しかしそれ位の力は何でもなからうと考へてゐたが案の定、あんな仕事か扇一本で出来たのだ。ね、汝らは見たであらう、俺が高殿に立つて太陽を招き歸したのを、そして驚いたらう、それから俺の偉さが泌々骨身に浸み込んだらう、な、俺は人間の未だ一度もやつたことのない、大變な奇蹟を現したのだ。あの分だと、秋の收穫を夏に繰上げて、年に二度の收穫でも出来るにちがひない。」

長者がそんな事を云ひ出す頃には、彼を始め、誰もが良い加減酔つてゐた。盃を踏み鳴らして踊る者があつた。海を前にした廣縁に腰かけて、良い氣嫌で太鼓を叩いてゐる侍女もあつた。

「そんな所へ腰かけて浮雲いよ。」

と云ひながら、自分の方がよつほどあぶなさうな足どり、廣縁に出て来るものもあつた。その若者は長者の近習であつた。

「あなたの方がよつほどあぶな相です。」

と、侍女は笑ひながら言つた。

「そ、そんなことがあるものか、だが長者は偉い人だね、太陽を招き歸すなんて。」

「まつたく、でも私なんか、乾度それ位の事は長者様に出來ると思つてゐました。」

「ふふん、さうかなあ、目の付け處がちがふな、俺なんかそんな事に就て想ひも及ばなかつたからねえ、さうかなあ？」

若者は、それだけ言つて、またよちよちとよるめきながら長者の脇へ歸つて來た。

下男下女の部屋でも、大變なご馳走で大喜びで、皆あちこちに十人、二十人車座となつて酒を飲んでゐた。彼等は秋の收穫の時よりもつと元氣で愉快であつた。

彼等の離から離れて、靜かに盃を傾けてゐるのは、例の二人の下男であつた。

「もつと飲んだらどうだ。」

「もう駄目だ。」

「遠慮しちやあいけない、こんな事は度々ありやあしなないんだけ、或ひはこれが此家での飲み收めかもしれない。」

「ああ。」

「本統にもう一本でも飲んで呉れ。」

「ぢやあもう一杯だけ、ところで今夜は大變なご馳走だつたな、酒だつて收穫より上等だ。」

「だからね、氣紛れの主人を持つてゐると困るのだ、氣紛れの主人に忠實に働いてゐると此世が



厭にさへなるよ。」

「本統に、二度と飲める酒ぢやあない。」

「さうだとも、明日からは又、麥飯に茶を打っかけて流し込まなくちやいけないんだらう、それに番茶を廢してから飯が美味しく食べられなくなつた。」

「番茶は今の濱茶より價値が張るんださうだよ。」

「さうよ。濱茶は夏だけ飲むものだ、年がら年中濱茶で飯を食べてると厭な生臭いにほひがしてゐる感じがする。」

「俺もさう思つてゐた。」

「平常打算的な男が、時偶こんな大盤振舞ひの氣紛れをやるのが、一等今の俺には恐ろしい。」

「つまらないね。」

「さうだよ、本統に下男奉公はくだらないよ、これ程なら馬方でもした方が同じ貧乏でも氣樂で良いと思ふ。」

「さうだね。」

繼て酒宴も片附いて一寢入したと思ふと、もう朝が來たのであつた。

長者は一番早く起きて、高殿の方へ寢卷の儘歩いて行つた。昨日のことが嬉しくつて嬉しくつて堪らないのである、もう一度植盡した稻田を見たかつたのであつた。自分の偉力を證據だてる見事な仕事の出來榮を見たかつたのであつた。

長者は高殿に出て目に餘る水田を見渡した

「アツ、何？何？何だ何だ。」

長者はのけ反る程驚いてそこへ釘付けのやうに棒立ちになつてしまつた。無理もない。\*



長者は叫んで水面を見つため

昨日たしかに綺麗に苗を植付けて置いた水田が、何時の間にか、恐らく夜の間に満々と水を湛へた周囲數里の大湖水となつてゐるではないか。

「何と云ふ不思議だ。」

湖水の水は蒼く澄んで深く、岸には昔しからそこにあるやうな蘆が、そよそよと吹く微風に觸れあつて、さやさや



と戦いでゐるのではないか。田の中を流れてゐる川はと見れば、その海に流れ入つてゐたあたりが、一面の丘となつてムツクリ起き上つてゐるのであつた。其湖と其周囲、すべてが昔からあつたやうに寂びて蒼く、對岸の雜木山は、何の不思議もなさうに水面へ姿を映してゐるのである。湖水の中には大小二つの島まで浮んで、島の裾の櫓の木は、朝の風に微かながら揺れてゐるのである。

「ああ、駄目だ、俺の自信はすっかり裏切られた、俺の信じてゐるものはみんな破れてしまつた俺は面目玉を丸潰しにしてしまつた。こんな耻かしいところを人に見られてはとても居られな

501

長者は、すっかり悄氣で、高殿から庭に降りた、丘の裾に建て連ねた四十幾つの蔵は、みな湖の底のあたりになつて一つの俵も一つぶの米も残してはゐなかつた。長者は湖水の岸に歩いて行つた。

「さやうなら。」

誰にもなくさう小聲で呟いて、彼はその儘水の中に飛び込んだ。水面でバツと水が碎けたが一つの波紋を描いてまた靜かになつてゐた。

「君の豫言の通りだ。」

「ああ、やつぱり。」

「何を見てゐるのだ？」

「長者の末路をさ、あれあれ、今水の中に飛び込んで死ぬんだらう。」

「行つて助けてやらうか。」

「行つたつて間に合はない、間に合はないのに飛んで行つてやる位長者は善人ではなかつたと思ふ、まあ止したが良い。」

「それ水煙が立つた。」

「姿が見えなくなつた。」

「波紋さへ収まつた。」

「罰が當つたのだよね、屹度。」

「罰でもなからうが、なる事がなる様になつたまでさ、然し長者も生き恥を晒すことを恐れただけでも善人に還つたところが見えるやうだ。」

「ああさうだ。」



二人の下男は、丘の上から眺めてゐた。

## 青島へ船を渡して

——源次郎友を救ふ——

源ちゃんの源次郎は、久し振りの日本晴と日曜日を利用して、友達の三人と一緒に、何處かへ遠足しやうと企てた。

麻尼山がよからうと云ふ者もあつたし、浦富の海岸を探らうと云ふ者も出たが、源次郎が湖山池へと云ひ出したので、結局傳説の湖山池で舟遊をすることにしたのであつた。

賀露まで歩いて行つて、其處から舟を借りて、源次郎が櫓を押し、エツサエツサと湖へ漕ぎ出たのは、春の深い或日の正午近くであつた。湖面は鏡のやうに澄んで、小波一つ立たない静けさである。

「波がないから良いねえ。」

と友達の誰かが云ふ。

「まつたく、僕一人で漕ぐんだから波でもあつたら少し困るよ、松原まで行つて引き返せば丁度

夕方になるだらう。」

と源次郎は答へる。

「良いお天気だね、お百姓さんがセツセと鍬を振つてゐるが、鍬がまるで銀のやうにピカピカ光つて美しい。」

と又誰かが云ふ。

「お百姓さんは一生懸命だよ、あれで水呑百姓だぞと云はれるが、お百姓さんが無くつちやあ第一米が出来ないね、第二に野菜が出来ないね、米が無くつちや食はれないよ。日本の軍隊も強いが、いくら強くつたつて米が無くつちや戦争も出来ないよ。」

と源次郎はエツサエツサと櫓を押しながら答へるのであつた。

「でもね、僕は、僕のお父さんに聞いた事だが、加藤清正が石田三成に米は食はなくても土を食つて戦争する覺悟があると云つたさうだから、土を食つても戦争するのが軍人の務めだらう。」

「さうぢやない、それは腰抜けで用心が過ぎる三成を貶してたとへ話をしたんだ。いくら軍人だつて、生きてゐるんだから、生きてゐる者はお米の飯を頂かなくつちや第一飢えてしまふ、力がなくなる、いくら頑張つたつて飢えて來ては堪らないよ、土を食つて生きて居ることが出来るや



うなら、何も値段の高い米の飯を食べはしないだらう。ただしかしだね、いざと云ふ時には二日でも三日でも食べないで我慢してゐる位の覚悟が、軍人には殊に必要である。」

「何故軍人には二日も三日も御飯の来ない事があるの？」

「それはね、戦争になると兵糧は軍隊の一番後から来るんだ、だから途中で故障でもあれば、兵糧隊の来るのが遅いことがあるんだ。その上にさ、強い城でも陥す時には敵の城の真下に陣を取つて、攻め上げる頃合の来るのを待つてゐる事がある。そんな時、本隊には遠い兵糧を取りに行かうとして動くと、忽ち射撃されてしまふのだ、だからそんな時は城を攻落して始めてお米の飯を頂くことが出来るやうになることはいくらでもある。」

「さうだねえ。」

小舟は廣い水脈を引いてギツコトンギツコントン櫓の音を立てながら、靜かに靜かに鏡のやうな水面を揺り動かして近づいて行くのであつた。

「こつちの島は何と云うの？」

「左手のか？」

「ああ。」

「青島と云ふんだ、向ふのが百足蟲島と云つて、一尺位もある大百足蟲がウチャウチャしてゐるんだ。」

「恐ろしいね、どうしてそんなところに百足蟲がゐるんだらう？」

「二三匹わたのが段々繁殖したんだらう？」

「その始めの二三匹はどうしてあの島へ行つたらう。」

「こつちの陸地から泳いで行つたんだらうよ。」

「百足蟲が泳いであんなところへ行けるかしら。」

「それは行けるだらう、百足蟲は大變身が軽くつてよく泳ぐから。」

「青島は百足蟲が居ないだらうね。」

「青島には居ない、あそこは暢氣な靜かなところで、百足蟲なんか一疋も居りやあしないよ。そして百足蟲島より大きくて高くて平地もあるから遊ぶには適當だ。」

「ちやあ青島で遊びたいなあ。」

「源ちゃん僕も青島で遊びたいよ。」

源次郎はクルリと舳を向き換へて櫓を押す手を少しも休めないで、



「さうかい、では小舟を青島に着けてやらう、しかし日暮れになつては困るから一時間位しか遊ばなすよ。」

「好いとも。」

「一時間で澤山だ。」

「早く歸らうよ。」

小舟は懸て、青い衣を着たやうに青草がしげつて、中に小さな丸みのある丘を持ち、極めて長閑さうな青島の一角に、スルスルと着けられて源次郎は櫓を舟から引きあげて置いて第一に島に飛び上つた、そして一つの岩へびつたりと舷を引き着けて云つた。

「さあ、僕が斯う持つてゐるから上り給へ、氣を注げてね。」

「落ちさうだね。」

「舟の下は眞蒼で深い。」

「大丈夫だよ、落つことしたりなんかしないから上り給へ、一緒に立つては舟がしつくり覆るか一人一人落着いて上るんだよ。」

「では僕から、やあ源ちゃん、手を捉まへて頂戴 あぶなさうだから。」

「無暗におつかながるねえ。」

「だつて目の下が着いんだもの。」

「そんな事大丈夫だよ、早く上りたまへ、愚圖々々してると後の人が困るから。」

「ああ、よいしよ。」

「それ来た。次は善ちゃんでも上りな、片手を僕に捉まつて、ひらりと此岩に乗り移るんだ。」

順々にさうして三人の友達を上陸させた源次郎は、舳の小綱を岩に、流れないやうしつかりと結びつけて、それから打ち揃つて島内の探険をするのであつた。

島は平凡な島ではあつたが、春の陽を浴びて平地の草原に寝ころんで話しをしてゐると、眠くなるやうに愉快であつた。

善ちゃんと呼ばれた少年が、丁度源次郎の頭の所に當る崖の上に座つて、源次郎に戯れながら種々なはなしをしてゐた。ところがあまりふざけ過ぎて崖からゴロゴロドンと湖の中へ落ちてしまつた。

「あッ」

と、少年二人は目を合せて、呆然としてゐるばかりであつたが、源次郎は突嗟に撥ね起きて裸に



なりながら崖の上へ走つて行つた。水に落ちた少年は、泳ぎを知らなかつたのか、一度水に沈んでから、又浮き上ると、アツプアツプと苦しみ跳くものだから、又沈んでしまひさうになつた。「やつ。」

と、懸をした源次郎は、少年を目がけて、水に飛び込んだ。そして巧みに立泳ぎをしながら彼に近寄つても、早水面から頭が隠れさうになつてゐる少年の身体を掴まうとした。

だが水泳の出来る人は知てゐるやうに、溺れた者は薬一片にも死嚙みつかうとするものだから、忽ち源次郎は少年の爲水中で片足をしつかり掴まれてしまつた。重い少年が片足にぶら下つてゐることだから、身体の働きが自由でなく、浮いてゐる許りか、だんだん一緒に沈んで行くのであつた。息をうんと吸つて沈みながら源次郎はどうして少年を救はうかを工風した。

源次郎は必死になつて、水中で友達が自分の片足を握つてゐる手を、無理矢理に振りきつたのである。それから、左手を少年の頸筋に當て、右の膝頭で腰を蹴りあげながら、水面へ浮いて行つた。

崖の上に残つてゐる友達達は、聲を揃へて、「しつかり、しつかり。」

と聲援してゐたが、肝甚の水に溺れた少年は、死人のやうにぐつたりとしてゐるばかりであつた。餘程水を飲んだらう。

源次郎は、小舟の繫いである方へ、少年の身体を宙に蹴りあげながら、漸く上ることが出来た。陸に残つてゐた二人の少年は、協力して死んだやうな友達の體を引きあげた。「僕が水を吐かしてやらう。」

よ、少し休んでおいでよ。でないとおとで苦しくなるからね。少年は嬉し相に腫を輝かした。



源次郎友水を中よ救ふ

\* 源次郎は水を吐かして、人工呼吸をして少年を漸く正氣に復らせる事が出来た。

「ああ。」  
「どうだ苦しいか。」  
「苦しかつた、夢中だつた。命拾ひをしたと思ふ。」  
「さうかい、だからふさげちやいけないんだ。」



源次郎の此日の働きは、いろ／＼な方面から賞讃されたけれども、少しもその賞讃に慢じ誇ると云ふことはなく、謙遜してゐるばかりであつた。

闇に燃ゆる怪光

——僕が正體見届けてやらう——

町の四辻で魚屋と呉服店の番頭が何か話をしてゐる。そして時々魂消た聲をたてる。

「どここの寺だつて。」

「新品寺町の寺の墓地。」

「何だらうかねえ。」

「何だか判らないが、しかし餘り氣味の良いものではなかつたよ、雨がしよぼしよぼ降つてゐる中で、ひよろ／＼ひよろ／＼と青い煙が空にたちのぼるんだからね。」

「毎晩かね。」

「殆んど毎晩と云つて良い位だ。」

「見届けた者はないのか。」

「誰も恐れて見届けないんだ。」

「意氣地がないね、それはきつと乞食でも火を焚いてゐるんだらうよ。」

「それは嘘だ、寺は嚴重だから、乞食は一人だつて半分だつてあの寺の中に入ることには出来ないのだよ。」

「さうかねえ、それでは幽霊かな。」

「屹度幽霊だね、もつと近寄ると屹度物凄い姿が見えるだらう。」

「俺は今夜行つて見やう。」

「危いから近くへ寄つてはいけないよ、誰もあの火を恐れて見ないやうにしてゐる位だから。」

「ああ良いとも、然し明治の聖代に幽霊なんてあるものぢやあない、俺はそれを見届けてやらうと思ふのさ。」

「無謀をやつちやあいけないよ、命に係はるやうなことでもあつたら大變だからね。」

「大丈夫だよ。」

「では氣を付けてね。」

「ええ、さやうなら。」



物語でこの會話を立ち聴きしてゐたのは源次郎であつた。  
怪し火？ そんなものが今の世の中に有るもんか、怪力亂神を語らずとか云つて、不思議を語る奴は臆病者か詐欺師かだ。よし僕がその正體を見届けてやらう。新品寺町の寺の墓地と云つてゐたな。

ひとり點頭いた源次郎は、何食はぬ顔をして家に歸り、自分の書齋に結枷扶座して靜かに膳を落着け、夜の來るのを待つてゐた。

源次郎の父森福太郎——當時須知源次郎も實家にゐて森姓を名乗つてゐた——は家庭教育に就てはかなり嚴格であつたから、夜間深更に外出することは一切禁じられてあつた。

父に知れては駄目だから、源次郎は十二時の時計が鳴ると同時に、裏木戸からそつと家を脱け出した。

四邊は暗さも暗し、一面の黒布の袋に入れられたやうであるが、源次郎は手探り足探りで道に出て、微かな遠い灯を道しるべにて、漸く新品寺町への道に出ることが出来た。源次郎が寺の墓地の塚を乗り越して、墓地に潜んだのはそれから間もなくであつた。

天地は唯寂として何の物音もしない、空は曇つて地上は漆黒で塗つたやうに眞暗い、源次郎は

息を殺して怪し火の燃えるのを待つてゐた。

「二時！」

遠くで時計が一  
時を打つた。その  
時、噂にたがはず  
廣い墓地の中程か  
ら蒼白い焰がひよ  
ろ／＼ひよろ／＼  
と燃え始めた。

「出たな。」

と思ふと、卵塔婆  
を押し倒し石塔を  
駈け抜けて、その  
靈も何も見えはしなかつた。源次郎は呆氣なさに暫くはそこに立ち盡した。



にけ届見な火怪

焰を目がけて源次郎は、一散走りに走つて行つたのであつた。

焰は恐れ氣もなく或新墓の石塔の下からころころと玉のやうになつて燃えあがつて、空に消えてゐるのであつた。ただそれだけであつた、幽



翌朝のこと、源次郎は父に妙な質問を始めたのである。

「お父さん。」

「うむ。」

「火を點さなくても燃えるものがありますか。」

「妙な事をきくな、燐などはお前の尋ねる性質を持ったものの一つぢやらう。」

「燐はどんな所に有ります。」

「それはどこにでもある人間の体内にもあるよ。」

「人間の体内の燐は燃えますか。」

「それは勿論だが、生きてゐる間には人間の生きて行くために必要な仕事をしてゐるから、燃えることはないが、死んでしまへば燃えて光るよ。」

「解りました。」

源次郎は怪し火の正體はこれだなと始めて合點して、世の中の不思議なんて云ふものは結局こんなくだらない事だと思つた。

寺の墓地の怪火は新墓の中で死者の體中のリンが燃えて光るのであつて決して幽霊だの何だの

と云ふ莫迦げた言葉を信用してはなりません。明治の御代にそんな不思議はないだらうと思つて一少年がたしかに見届けて置きました。

こんな文章を記した半紙が、何時の間にか役所の掲示板に張つてあつた。そして評判がバツと立つて、町の人の噂の中心になつて、恐れられてゐた怪し火の話はその後きかないやうになつた。役長はそれを見届けた少年に褒美を贈らうと思つて種々調査したけれど、源次郎が自分の胸に堅く秘めて何事も語らなかつたから、誰も源次郎の源ちゃんであらうとは氣注かなかつた。

### 軍隊生活へ

— 源次郎教導團に入る —

源次郎は十六歳で陸軍教導團に入ることになつた。千代川にも袋川にも、そして久松山にもさやうならを告げて、勇ましくも大なる抱負を持つて、笈を負ふて上京した彼は、直ちに教導團に入つて、爾來一念に倦まず撓まず軍事知識をとり入れ實地に習練に研究するところが多く、其成績は常に拔群であつた。

翌年——即ち明治十年——源次郎は十七歳で伍長となり、西南の役に赴いたが、中途にて役終



り賊軍平定の報告に接したので、賊と戰場に相見ゆることなくして引返した。

明治十一年彼は十八歳であつたが、其非凡なる俊才であることは知己の間に傳稱され、遂に望まれて須知家を繼いだのであつた、源次郎は森福太郎の二男であつた。以後彼の姓は須知と呼ばれるやうにはなつたのである。

明治十四年彼は士官學校に入り、十七年二十四歳にして、始めて歩兵少尉に任ぜられたのであつた。

姫路聯隊附より近衛第三聯隊に轉じ中尉に進み、故川上大將の知遇を受けて參謀本部に副官を奉じたのであつた。川上大將の知遇を得たことは、彼自身に執つては自己の天才を發揮する機會を得たものであり、國家に執つて有爲の材を最も有爲に登用して國家に貢獻せしめ得たものであつて、それは馳て彼の聲譽が世界に轟く最初の好き出發點であつた。

二十七八年日清戦争の始まるや、大尉に進み山縣有朋大將に副官として九連城、鳳凰城の激戦に参加したが、山縣大將が偶々病を得て歸國するに従ひ一先づ歸り、更に再び野津大將の副官となつて出征し、凱旋後歩兵少佐に任ぜられた三十一年には川上大將の選拔に依つて佛國留學を命ぜられ、異國の軍事事情に就いて精密廣汎の研究勉學を遂げ新知識を提げて三十四年八月歸朝し

た。間もなく近衛歩兵第二聯隊長を命ぜられた。

征途に就くまでは、陸軍大臣秘書官を勤め、軍人界に佛國通を以て知られてゐた。源次郎が如何に秀れた人物であつたかと云ふことは、陸軍部内で人材を拔擢しなければならぬ必要の生じた場合、第一に、

「須知源次郎を。」

と名指しをされ、必ず任命を外れたことがないので大凡そは見當がつくであらう。

須知中佐は非常に鋭敏な頭腦を持ちその行動は極めて敏捷であつたが、性來沈黙を尊ぶ人であつて、乗馬を好み、ひいては馬を愛撫すること一通りではなかつた。常に、

「乗馬は大切にしていられよ、馬だつて生きてゐるんだから、日頃可愛がつてやつてないと、戦の始まつた時は本當に困るから。乗馬には愛をそそいでやるやうにせよ。」

と部下の將卒に訓へるのであつた。

陸軍大臣秘書官を辭し、常陸丸乗組を命ぜられた須知中佐は、愈々出發と云ふ日にも何一言未練がましい別れの言葉を言はず、漂然と出懸けて行つたのであつた。そして漸く乗船の當日になつて、「六月十四日常陸丸に乗船、僚船佐渡丸と俱に某地方へ赴く筈」と云ふ意味の手紙を留守



宅の夫人へ送つたばかりであつた。  
須知中佐と夫人の間には、二男二女が其時あつて、夫人は養母に事へながら留守宅を守り、甲斐々々しく四人の子供の生長に努力してゐたのである。

### 朝霧暗き中に敵艦

—砲聲を味方の演習と誤る—

明治三十七年六月十四日午後六時、宇品の港を抜錨した常陸丸及び佐渡丸二隻の運送船は、翌十五日の黎明、關門海峡を通過し、祖國の山の遠さかり行くのを眺めながら、名にし負ふ玄海洋に指しかかつたのであつた。

玄海洋の浪は荒らく、船は甚しく動揺する。此朝は殊に濃い乳のやうな霧に、海上一面の展望は妨げられて、航行にかなりの困難を感じたから、常陸丸は佐渡と相警しめながら前後に列して唯羅針盤を唯一の道しるべに進航するより外はなかつた。

玄海洋に出たのは午前七時五分であつたが、午前八時、船の前方に當る沖の島の方向に於て、數發の砲聲を聞いたけれども、乗組員は誰として怪しむ者もなく、我が軍艦の演習があらう位に

思つてゐたのである。

斯くして數百千の鐵鎗を載せた常陸丸は、船に荒浪を蹴つて一路安かれと進航して行つたのであるが、總て間もあらせず、突忽如と前面の霧を破つて、現れた怪艦があつた。砲門は開かれ、砲口は我に向つて巨龍の猛虎を呑まむと構へてゐるやう。噫何と云ふ瞬間の災厄よ、敵艦はグロンボイであつた。\*



敵は常陸丸を見ぬ巨砲數を浴たせ

「全速退航。」  
だが併し、輕快で且つ武装した軍艦である。我は唯武装なき一運送船の悲しき退航すれば追ひ継り戦はんとて術もない續いて左舷の前面よりは軍艦ロシア、右舷の前面よりは軍艦リユーリック霧を破つて現れ、グロンボイと三角陣形を保つて漸次に常陸丸を壓迫して來る。常陸丸の運命はここに



谷まつた。

心ばかりは逸れども、運送船の悲しさは、進退ここに谷まりて、詮方なくも敵艦に、委せ果てしぞ是非もなき……。

こは何事と云ふ間なく、亂射亂撃雨あられ、進み遁れむ隙もなし、千里を走る猛獣も水に入りては如何にせむ、萬里を翔くる大鵬も、浪には翼折れぬべし……。 (琵琶歌)

グロンポイと共に急速力で我が常陸丸を包圍した右舷のロシア及び左舷のリュウリックは、約そ千米突の距離に近寄ると俱に、

「停れ。」

と信號して置いて、直ちに二十餘發の砲撃を我に加へ、其五弾は常陸丸に命中破裂して、たちどころに數十名の死傷が出来、甲板上是血の海をなし屍の丘を積みあげたのである。

「萬事休すだ、もう駄目です。」

船長英人ジョンカンベルは須知中佐の手を握つて悲痛な面持をしながら、最後の船の運命を宣告して、ほつと吐息を吐いた。

「解りました、では船の生命は長くはない事です。僕はこれから甲板に全員を集めて、日本軍人

が最後に見苦しい態をして呉れないやうに訓示します。」

「須知中佐、妙な縁でしたね。」

「本當に！ 一緒に参りませう。」

全員は彈丸雨下の甲板に集合して、中佐の悲壯きはまる訓示を聞き入つてゐるのであつた。

「我等は滿洲に戦ふべき使命を帯びて祖國の山河を後にして來たのであるが、未だ敵地に一步をも印しない今日唯今、豫期しなかつた敵の優勢な艦隊に遭遇して、所詮これより遁れ去ることも戦ふことも出来ない。敵の名は記憶せよ、グロンポイ、ロシア、リュウリックの三艦である。戰場に到らず敵の總練と一快戦をも試みずかかる洋上に斯くの如き災厄を受くるのも、之れ皆運命の然らしむるところであつて人力の如何ともする事の出来ないのを自覺し、皆潔く自ら處決するの覺悟がなくてはならない。我等は、よろしく大元帥陛下の總練たる體面を保ち、千古脈々として傳統した日本武士道の眞精神を發揮し、日本男兒の名譽に汚點を印するやうな卑怯な振舞ひがあつてはならない。重ねて云ふ、日本軍人の盛名を汚すなかれ」

須知隊長は、全員に訓令を與へた後、自らの船室に歸り、將校に命じて燃焼物を聚めさせ、聯隊旗及び貴重機密の書類を悉く焼却し、のち心靜かに割腹して壯烈な最後を遂げた。



残る將士敵艦を見て憤激慨嘆し、自ら身を海中に投じて敵艦に泳ぎ着んとして射撃を受ける中、水中に時ならぬ紅葉を散らすもあり、敵を睨んで甲板上に立腹を切るもあり、短銃を以て一氣に自殺するもあり、雨の如く霰の如く飛び来る弾丸に傷つけられて自殺するに、肢體自由にならず介錯して呉れと呼者も \*



やよ見を後最の人軍本日

\*ある死屍は山を積んで血潮は甲板を川をなして流れ潮の色も變るばかり、まことに惨々見るに堪へざる凄愴の光景である。敵の三艦は砲撃を加へること數十發に及び、ひとたび退いて沖の島の南方に止まり、常陸丸最後の悲惨な光景を傍觀してゐたが少時、再び前進し來り、殊にロシアは五百米突の近距離に

接近し來つて三百發の霰彈を雨下したので、常陸丸の甲板と名の着く所、舷側と呼ばれる限りは悉く恰も蜂の巢の如く傷つけられ、殊に艦部吃水下に命中した十餘發の弾丸が致命傷となつて午後零時三十分永遠の恨みを載せて玄海洋の底深く沈んで行つたのである。船體が波間に沈む刹那であつた。尙生き残つてゐた者傷いた者は、陛下の萬歳を叫びながら、又は軍歌をうたひながら、船とともに沈んで行くのであつた。此難に殉じた我が將士は、須知中佐を始めとして將校、準士官、下士、兵卒等六百三十五名、又乗組船員で難に殉じた者は船長ジョンカンベルを始めとして同じく英人一等運轉士ビショップ機關長グラスその他水夫給仕に至るまで、多く船と運命を同じうしたが、船體沈没の後端艇に乗り又は木材に縋りなぞして生存救助せられた者は僅かに九十六名に過ぎなかつた。

### 上村艦隊晝寐か

——世論罵々と沸騰す——

越えて八月二十日常陸丸殉難將校、下士兵卒の合葬が東京青山に於て行はれた。吊旗は燃焼すようなる炎暑の中に力なく頸垂れて、痛恨に堪へぬ此出來事を悲しむるようである。我が



軍の連戦連勝に酔ふて、妙からず上づつてゐた國民も、此葬列を送迎しては當時の悲壯慘烈なる  
 状景を想起して、悲憤の涙に暮れぬ者はなかつた。

これより先、常陸丸遭難の報一度傳はるや、世論囂々と沸騰して、浦鹽艦隊監視の任にある上  
 村艦隊無能なりと叫ぶ者が出来、上村中將の留守宅の門扉に、

「上村は國賊だ、天討を加へよ。」

「上村は賣國奴だ、浦鹽艦隊に好誼を通じて常陸丸を撃沈せしめた。」

「上村艦隊晝寝か、滿洲ぢや生命を捨ててお國の爲に盡してゐるぞ。」

等と云ふ貼紙が毎日毎夜のやうに貼りつけられた。當時の輿論と云ふものは、現今から考へれ  
 ば低級なものであつたけれども、權威を持つてゐたから、海軍當局でも困つて、上村中將に勝手  
 な注文をしたとも傳へられてゐるが、何にせよ日本海の悲雨慘霜に日々夜々晒されながら、華々  
 しい戦をする敵が現れて来るではなし、唯監視てふ名目に依つて渺茫たる大洋を巡航してゐる  
 のは、かなり苦しいことであるに違ひない。限りある艦艇で、涯みなき海を守る苦痛と心勞を想像  
 せよ。

世論の身に不利なるを知り乍ら、上村中將敢て辯明せず、

「心しらぬ人は何とも言はば言へ。」

と心の中で、無念の涙を流しながらも、顔には出さず、心ばかり急ぐ部下を慰めて靜かにしてゐ  
 ると云ふのであつた。

上村艦隊の一軍艦船長の乗組士官に大尉原口鶴次と呼ぶ勇士があつた。上村艦隊が世の誤解を  
 被り、非難の中心となつてゐる時、

「どうか私にポートと爆薬を與へて下さい、何處までも索敵して屹度やつつけてごらんに入れま  
 すから。」

等と血氣に逸つて思慮分別のない部下が嘆願するのを、原口大尉は靜かに諭して、

「命を貰ふ時には必ず貰ふ。それまでは汝に預けて置くのだ。心ばかり逸つても駄目だ。よしや  
 世評は何とあらうとも、我等の運が開かないからだと思つて時節の來るのを待つてゐるんだ。い  
 さと云ふ時には必ず生命を貰ふから、決して輕卒に大事な生命を捨てゝはならぬ。」

と云ふのであつた。

「祖國の同胞に面目次第もない、上村艦隊は晝寝をしてるかと言はれてゐるさうだ、残念で  
 ならぬ。」



「さうださうだ、實に残念である、早く良き敵に出會つて快戦を試みなければ、祖國の同胞に申譯がない。」

等と部下が悲憤慷慨してゐるのを、見ても聞いても、原口大尉の心は張り裂けるばかりであつた。一日も早く敵艦を撃ち沈めて我も日本海の底の藻屑となつて、祖國への申譯をしやうものと溜息吐いて、艦隊の不運を悲しむのであつた。

或日のこと、原口大尉は浪速艦に座乗してゐる實兄房次郎を訪問し、何一言も云はず、滂沱と落つる泪に頬を濡らして、ちつと兄の瞳を見詰めて無言の儘で兄の手を握つてゐるので、兄は驚いて、

「鶴次、どうしたんだ。」

と訊ねると、原口大尉は吸りあげて、

「浦鹽の艦隊と火のやうな戦ひをして討死したい本願が、どうして遂げられぬでせう。」と云つて又男泣きに泣いたのであつた。そして此兄弟の對面が此世での終りであつた。

八月十四日、卑怯なる浦鹽艦隊の悪運も盡きてか、我が上村艦隊と對馬の沖に會戦することとなつた。

殷々轟々たる砲聲、爆々たる音響、海若も夢より覺める荒れの海原に、敵と我とは必死の砲火を交へるのであつた我には千載の遺恨がある我々には金州、常陸の近き怨みがある。

「そら、貴様達の命の捨て所だ。捨てやうと云つてた命を貰つた、命は貰つたぞ惜しまず働け、上村艦隊の手並を示めせ。」

と、原口大尉は打ち頬笑みながら、味方を顧みて勵ますを、元より必死の覺悟を固めた我が士卒は一人當千の勇を揮つて、生死の境に立ちながら、敵艦よりの射撃の拙劣なものを囃立てたりする程で、磐手は最も多く敵の砲彈を被つたが、敵に與へた損害は、より莫大なものであつた。

忠勇義烈の原口大尉は、此會戦中、遂に敵の一彈を被つて、華々しき名譽の戦死を遂げたのであるが、當時の輿論を興した我が當時の無理解なる民衆は、

「同胞に面目ない、敵と戦つて死にたい。」

と叫んだ士卒、大尉の靈、また上村將軍に對して何の言葉を以て謝さうとするであらう。

嗚呼——激烈なる戦鬪、この戦鬪の影には、幾多の將卒が、骨を碎き、肉を破り、鮮血を漲らしたる、尊き犠牲の花が、床しく、香ばしく咲き匂ふて、狀とりんに紅を染めた事を、我れ等同胞はゆめく忘れてはならないのである。



余は此の華々しき海戦を語るに先だち、耳に聞こえ、眼に映じた、治療所の凄惨なる光景は、何時までも眼の前に髣髴と浮んで、終生忘れる事が出来ないのである。

あゝ——彼等勇士の魂よ、永遠に安らかであられん事を我は衷心から祈るのである。

御製

かぎりなき世にこのさむと國の爲め

殞れし人の名をそとどむる

猶云ふ、汝等同胞の永遠に安静なれと、九段坂上の二つの大鳥居の奥深く、茂れる木の間に、尊き犠牲者の靈を永遠に弔ふべく幾千代かけて安置されてあるのである。

# 向井中尉

## 優れた才能

——僕は政治家となるよ——

「元ちゃん、こつ、へおわで。」

檀那寺の和尚の嶺全さんが、本堂のぐらい所から半分顔を出して呼んでゐる。

「なあに？」

元太郎は一二と元氣よく、山門の所から走つて来て、和尚さんを見上げながら答へる。

「元ちゃんは何時も元氣だね、何をしてたんだい。またいたづらをしてたね。」

「いゝえ、僕はね。山門のところで戦ごつこをしてたんだい、あつちが強いのでね、負けさうになつてゐる所だつた。」

和尚さんは老眼鏡を鼻の上に、今にも落ちさうにのつけて、その奥から人の好い瞳をにこにこ



させながら、元太郎の血色の漲つた顔を眺めてゐるのであつた。

「さうか、さうか、戦ごつこは良いが、怪我をして大切な親から頂いた身體に傷をつけてはならないよ。わしは又、この間の悪太郎の様に、山門の塀へ樂書でもしてゐるのかと思つた、まあまあ、こつちへお上り。」

「ええ僕上つても良い。」

「良いともさ、お天氣が良いから、裏のお縁側で日向ぼつこでもして、元ちゃんの好きな孫行者のおはなしでもしやうか。」

「ああ和尚さん、孫悟空のお話がきけるんなら僕上らう。」

「さあさあ、こつちへお出で。」

裏の縁側からは、すうつと續いた山々や、青々と稻の茂つた平野や、又銀絲で刺繍した帯のやうな川が眺められた。

庭の木々は青葉を装つて、その葉がくれに紫色の羽を持つた、美しい小鳥が飛びはねて、楽しい歌を唄ひながら遊んでゐた。又お庭の小さな瓢箪池には、緋鯉や真鯉や鮒が、嬉々と泳ぎまはつてゐて、池の面は靜かな波紋が時々立つた。それは愉快な魚たちが、思ひ出したやうに水

面へ頭を出すからであつた。すべてが眞夏の潑刺としたのどけさを有つて降り注ぐ日光を吸つてゐるのであつた。

「和尚さん、和尚さん。」

元太郎は池の中をちつと眺めながら、不思議さうに呼びかける。

「何ぢやえ。」

「あのお池のお魚ねえ。」

「あゝ。」

「あれには毎日ご飯\*

「そりやさうぢや。」



お池のお魚はご飯食べるの

\*を食べさせるの？

「ハ、ハ、ハ、いやい

や、そんなことしたら厄介で堪まらんわ

よ。」

「だつて怪しいなあ。」

「どうしてぢや？」

「だつてだつて、ご

飯を食べなくちやお魚だつて生きてられないだろ。」



「そんなら和尚さん、あの小さいお池からどうしてご飯をこしらへるの？」  
元太郎は不思議なことに云つた顔で和尚の顔を見詰める。

「いんや、そりや何ぢや、ああして時々——ほら今も水の上へ顔を出したろ、ああして水の上へ来た蟲を食べてゐるのぢや、そしたらご飯を作へんでも生きてをることが出来るだらう。」

「では若しね、お天気が悪くなつて虫が飛ばなかつたらどうするの？」

「そしたらお天気の好くなるのを待つてゐるばかりだよ。」

「食べないで。」

「食べなかつたら死にまうよ。」

「でも何日も食べないでは生きてゐられないでしよ。」

「そりやさうぢや、だが魚はお天気の好くなるまでは我慢して待つとるよ。」

「もし人間だつたら死にまうね。」和尚はハタと手を打つて、

「其處々々、よい所へ気が附いた、人間は食べんと云ふと餓じうなつて死んでしまふ、だから平常心懸けて、お天気が悪くなつてもご飯が食べられないと云ふやうなことはないやうに、蓄への心掛けをしてゐなければならん、ふだん食べる時に食べるだけ食ひ、飲める時に飲めるだけ飲ん

でゐると云ふと、いざお金がないお米がない、稼ぎに行かうにもお天気が悪いと云ふ時になると、まつたく立つにも立てず居るにも居られずと云ふやうに、困ることがあるのだよ。」

和尚は小僧の運んで来た茶盆からお茶碗を取つて、匂ひの高いお茶を注ぎながら云ひ續けるのであつた。

「國でたとへて言ふなら、ふだん政治をする人の心懸けが悪くて、税金の上り高を皆色々の仕事に使つて仕舞つたなら、使つた金で世の中のための仕事は出来るには相違ないが、いざ戦争と云ふ時にでもなると、兵隊さんの鐵砲の弾も食べる物も取り寄せて充分の戦争をする事が出来なくなるのぢや、昔しから云ふだる、腹が空つては戦が出来ぬつてね、本統ちやよ、兵隊さんだつて——いや兵隊こそ一生懸命にお國のために大君のために働くのだから、お腹は一層空くのぢやが、若し兵隊さんの費用を國のお上から送つてやる事が出来なんだら、折角強い日本武士も、負けて仕舞はねばならんことになる。」

「和尚さん、僕政治家が好きになつた。」

「さうかい、元ちゃんは賢いから、一心に勉強したら、偉い偉い世界に稀な大政治家になれるよ、一生懸命に勉強するのだよ。」



「だけれどね！」

俄に元太郎が萎れるのを眺めた和尚は、心配顔に少年の涙ぐんだ瞳をさしのぞいて、

「急に元気が無くなつてしまつたな、どうしたの？」

「僕日本一の大政治家になりたいけど。」

「どうしたのさ。」

「あのう和尚さん、僕にはお祖母さんと妹があるつきりで、お母さんは小さい時に亡くなつちまうし、お父さんは遠い遠い所に行つてしまつて歸つて来て呉れないし、誰も僕に勉強させては呉れないんだもの。」

「おうさうかさうか、だがそんな事を心配せんでも良い、元ちゃんも男子だらう、男子がめそめそ泣くと見つともないよ。なあにお金を出して呉れる人はなくても、一心になつて苦學すれば大學校を出て學士さんになる位の事は何でもないからね。」

と、和尚は元太郎を慰めてゐる、が元太郎は未だ心懸りだと云ふやうに、

「でも和尚さん、苦學して大學校に出られるでせうか。」

「何々、苦學して博士にまでなつた人も、大臣や總理大臣になつた人はいくらでもある世の中ぢ

やよ、そんなこと心配せんでね、これから勉強を一心にするが良い。」

元太郎は涙をぬぐつて晴々となりながら、

「ぢや僕、屹度世界に名を擧げるやうな政治家になるよ。」と言ひ放つた。

### 迫害に屈せず

——色々な難癖をつけられて——

元太郎とその妹の信子とは、亡き母方の祖母に引き取られて、澤山の従兄弟姉妹たちと一緒に暮してゐたが、従兄の長太郎は特に悪太郎で腕白大将で、泣き味噌の癖に蔭べんけいで、自分の家では家族も同様な元太郎兄妹を、殊に虐めたり「親なし子烏阿呆々々」と罵つたりするのであつた。

或日の事、元太郎がお庭で草捲りをしてゐると、長太郎が不機嫌な顔をして、夏と云ふのに懐ろ手なんかして生意気にすまし返りながら、やつて来た。

「元、何しとる。」

「僕草捲りだよ。」



「何？」

「草を捲つてるのだよ。」

「草を捲つとる、何だい生意氣な。」

と、長太郎は下駄の先で、故意に草捲りをしてゐる元太郎の指先を、いやと云ふほど踏みつけたのであつた。

「痛い、長さん何をやるんだ。」

「何をした、え、俺が何をした。」

と責めるやうに身を擦り寄せて来る。

「何、何をしたつて人があるもんか、僕の手を踏んどいて。」

「手を？ 嘘つけ、お前が断りなしに俺の下駄の下に手を突っ込んだぢやないか、俺が何をしたさ、言つて見る畜生。」

「……………」

元太郎は、自分が養つて貰つてゐる伯父さんの總領息子だから、と思へばこそ罵られても踏まれても、ちつと痛さを堪えて我慢してゐるが、長太郎はそれを笠に着て、

「元、貴様は生意氣だぞ、今朝俺の机の上の眼覚し時計の硝子を壊したのは貴様だらう、どうして壊したんだ。」

「僕は、僕は長さんの時計を壊したりした覚えはない。」

「ないことがあるもんか、新らしいのを買つて返して呉れ、何？ 買ふ金がない、嘘吐け、近頃お父さんの金

がなくなるさうだが、貴様でも盗みやがつたんだらう

それでお金がないもあるもんか、買つて返せ、返せ。」

「泣け泣け、泣いたつてちつとも恐ろしかあないぞ、大泥棒の癖に弱い奴だなあ、もつと泣け厄介者、もつと泣け大泥棒、節をつけて泣きやがるな、怪しからん厄介者のくせに、生意氣きはま



僕の手を踏んだり痛いやいなかい

\*「僕はそんな悪い事はない。」

「嘘吐き、貴様は本統に生意氣だぞ、神妙さうにさうして稼いでる所は少しも泥棒らしくはないが陰では大泥棒をしてるんだらう！ 自家の厄介者の癖に大外れた奴だ。」

「……………」



るぞ。」

厄介者と罵られても、日蔭者と呼ばれても、亦泥棒の汚名を着せられても元太郎はちつと齒を食ひしぼり、腫からはらはらと涙を落しながらも、ぢいつと我慢をしてゐたのだつた。

「莫迦野郎、長太郎さんに手出しは出来んだらう、して見ろ、お父さんに呟付けて自家から追ひ出してやるから。」

「……………」

「フッ、泣いてやがらあ、弱い泥棒野郎だなあ、貴様は一代俺様の家來で、さうして庭の草を搥つとりやあ良いんだ、生意氣な根性を起すと追ひ出してしまふぞ。」

長太郎は無茶苦茶に威張り散らしてから、地面の小石を、元太郎の向ふ脛に蹴りつけて置いて、得々と裏木戸から出て行つた。

「見てゐろ、畜生ッ。」

元太郎は其後姿を見送つて、奮然と立ち上つた。

「僕が偉くなつたら、屹度仇を打つてやるぞ、僕は政治家になるのだ。」

口惜しい涙が、熱い涙がはら／＼と頬を傳つて流れた、そこへ妹の信子が外から歸つて来て、

泣いてゐる兄を見付けて走りよつた。

「どうしたの？ ねえ兄ちゃん。」

「どうもしたろ。」

と、元太郎は、未だ學校にも行かない妹を見ながら、何気なく涙を拂つて答へた。

「泣いた？」

「泣きやあしな。」

「だつてだつて、涙が出てるわ。」

元太郎は後から後から、とめ度もなく涙の流れ出る眼をそつと押へながら、

「芥が入つたのだよ。」

「さう。」

何も知らない幼妹は、それで安心してしまふのであつた。

「僕が早く出世して此妹に樂をさせてやるんだ、こんな鬼の棲家のやうな家に、いつまでも居てはいけない。」

と、元太郎は屹と心の中で考へた。我慢する所では我慢しろと、小さな時から和尚さんが教へ



て呉れた。だから我慢の出来るまで此家で辛棒しやう、そして勉強しやう。併し何時までも人の世話を受けるのは男子の面目を潰すものだ、とも考へた。

元太郎は、小學を優等で卒業した。伯父は資産家であつたが、彼を中學校に入れてやる程親ではなかつた。彼を自分の家の下男同様に追ひ使はうと考へてゐたのだつた。

然しながら、祖母や和尚の熱心な勧めに従つて、澁々ながら、元太郎を中學校に入れたのである。元太郎は學費として僅かの金を伯父から渡されるだけで、それだけでは勿論足りなかつたのである。で、元太郎はいろ／＼の勞働をしてその償ひをしなければならなかつた。

「大政治家、大政治家。」

彼の心の中では常に此心が鞭ともなり杖ともなつて、彼を勵まして鞭打つた。元太郎は死になつて勉強した。彼の成績はメキメキと群を抜いて、常に首席から二三位を下りはしないのであつた。

## 父 歸 る

—思想を異にする講師—

過激の勞働の餘暇は、彼のためには凡て讀書と研究の時間であつた。元太郎の熱心さは人を動かして中學を目出度く卒業する時は、有力な後援者さへ出來た。そして當初の目的である高等學府に學ぶの幸運が順調にめぐつて來たのであつた。

「ではお大事に。」

村の端れまで見送つて呉れた老和尚や、伯父や近所の人、それから可愛い妹に、彼は學帽を脱いで別れを告げた。

「身を大切にしろよ、體が第一だからなあ、落ち付いたら直ぐに所を知らして呉れ、試験の結果を待つてゐるぞ。」

鬼のやうな伯父も、矢張り別離となると恩愛の絆にひかされて、涙で腫を潤ほして云ふのであつた。

「心配事は直ぐ知らせなされよ、決して獨りで思ひ過ごしなさんなよ。」

と、老和尚は杖に縋つて元太郎の顔を、シヨボ／＼した瞳で見上げて云ふのである。

「御親切に有難うございました。」

「體に氣を注げなさいよ。」



「立派に出世して歸んなさる。」

「休暇には戻つて來なされよ。」

と、近所の人たちも口々に、眞心こめて言つて呉れる。

「これは輕少だが。」

「これは志ばかり。」

「お恥かしいけれど、これを。」

と、心を込めた饞別を與へる。元太郎は、

「有難う。」

と唯一言、感謝と別離とに胸に涙がこみ上げて來るのを、ぐつと呑み込んで、

「兄さん、立派な人になつて歸つて下さいよ、私は指折り數へて、兄さんの卒業を待つてゐますからねえ。」

と、信子は、目を泣き腫らしながら、しげくと兄を見上げて言ふのであつた。

「大丈夫だ、身體を大切にしてくれ、では皆様、さやうなら。」

「さやうなら。」

と、人々も異口同音に言つた。

斯くて上京した元太郎は、前にも倍する勉學をなし、早稻田大學の前身である東京専門學校に入學した。

「東京へ東京へ。」

と心の中に叫んだ、久戀の東京には住む身となつたのである。それから程なく、他郷に在つて音信さへ不通であつた父が、郷里に漂然と歸つて來て、妹信子を引取り熱心に家業を勵むやうになつた。そして元太郎にもその由を告げ、月々生活費より幾分を割いて彼の學資の補足をしたのであつた。

東京専門學校政治科に入つた元太郎は、殆んど他とは没交渉の中に在つて、一心不亂な勉強振りを發揮して、一意本願とする政治家への途に猛進を續けたのであつた。

「おい、あんまり家の中へくすぶつてると神経衰弱になるぞ。」

「有難う。」

「勉強を過すと身體を壊すぞ。」

「僕の身體は南蠻鐵の筋金入りだ。」



「無理だな、併しどんな立派な健康者だつて毒になるぞ、氣保養でもしろよ、氣保養でもしろよ、今夜萬世の寄席へ行かんか。」

「寄席？」

「さうよ、小さんが掛つてるよ、彼奴は大分旨くなつたな、それに落語ばかりぢやない、新内も常盤津もあるぞ。」

「僕はね。」

「うむ。」

「僕は寄席も落語も\*

ない、だが僕に取ては、寄席より教室がよほど親しいからね。」



勉強の僕がのるす楽道のよ

\*大きらひだ。  
「妙だな、落語は單なる笑ひ話ではないぞ、落語も殊に江戸の落語は、あしたところできくのは全く藝術的だね、あれ位にたると低級では決してないよ。」

「さうかも知れ

「まったく變だね、君のは學問病とでも云ふんだらう。だが無理には動めないよ。」  
「ぢやあ、さうして呉れ給へ。」  
常に斯うした問答が下宿の二階で行はれたのであつた。それ程興行物は嫌ひであつた。そしてその時間をも惜しんで刻苦勉強、必死となつて勉強してゐるのであつた。  
元太郎は恙なく難關をパスして、明治三十年愈々卒業して得業した（現在の學位と同意味）のであつたが、此期の卒業試験に就いて面白いまた一面元太郎の性格を窺ふべき逸話が殘されたのであつた。  
東京専門學校の講師某氏とは、常に思想を異にして、如何にしても共鳴することが出来なかつたのである。ところが卒業試験の際、講師の出題に對して、潔白な元太郎は、己れを欺いて氏の意に副ふやうな答案を書くことが出来なかつたのである。彼の提出した答案は、自己流の立場から觀察した特殊の答案であつたから、某氏は彼に一點をも與へなかつた。  
斯くしてこの科目の爲危くドロップの悲運に際會するべきところを、他の教授の盡力に依つて種々詮衡の結果、他の科目が總て優秀であると云ふ理由で、難なく卒業することが出来たのであつた。



其年十二月、元太郎は一年志願兵となつて入隊し、除隊後陸軍歩兵少尉に任ぜられ、豫備役仰せつけられたのであつた。これが他日戦場に花々しい働きを示すやうになつた第一歩であるのであつた。

除隊後の元太郎は、専心商業政策の研究に身を委ねるやうな傾向になつて行つた。

### 散策の夜

——強く生きて生き抜け——

「向井君、散歩しないか。」

友人の黒田が、何時もさうであるやうに、瀟洒なフランクスタイルの服装で、元太郎を訪ねて来たのである。

「黒田君か、今日は好いお天気だね。」

「さうだね、こんな日は郊外を散歩するに限るよ、どうだい田端の方へでも行つて見ないかい。」

「よからう、ちか頃は書き物が多くてすつかり頭を疲らしてゐるのだから、少し散歩でもしなければ堪らんと思つてゐたところだ、幸ひこれから出懸けやう。」

元太郎は銘仙紺の重ねに春らしい袴を穿いて、細身のステツキを脇挟みながら、黒田と手を組んで田端の方へ下りて行くのであつた。

「近頃はどんなものを書くんだい。」

「近頃か。」

「ああ、大變書くと云ふぢやあないか。」

黒田は、少し酔つてゐるらしい。

「なあに、くだらないさ。一頃懸命に書いた國家政策論も、もう雑誌屋で買つてくれないから、此頃ちやあ、商業に關した翻譯やら研究やらを發表してゐる始末よ。」

「何に書いてるんだ。」

「それ、商業研究よ。」

「商業研究か、あれは原稿料が高いさうだから、すゝ分生活の安定も得られるだらう生活の安定を得ると云ふ事は實に立派な事だ。」

「俺の様なまだ若かいものは生活の安定等と云ふ事を考へた事はな。」

「今でもか。」



「さうさ。」

「成程ね、昔しから君はおぼつちやんだからね、君は偉いね。」

「偉いかどうか解らない、俺自身ではね。だが俺は今のやうに急がしい時代には、外の事で頭を使ふ事はたいへん不利だと思ふのだ。何んな事でも考へれば悪い事はないがね、然し苦しい事は誰れでも同じく苦しいのだ。」

「それはさうだ。」

「さうだらう！ 藤井なぞに言はせると、金のない者は無風流で、そして露骨で、その上不景氣な顔は何時もしてゐるつてね。しかし俺の方から云ふと、若くて貧乏でゐながら金のある振をしてゐるのを見ると、まるで酔っぱらつた氣狂ひが、勝手なことを吹き散らして居るやうだよ。若しさうでなかつたら、一層憂鬱で利己的だと思ふね。」

「さしあたり俺だな。」

「ふふん、君が貧乏で堪るか。君は貧乏人に交つて居るから妙に「俺は貧乏人だ」が口癖になつてしまつてゐるね。」

「事實俺は貧乏だ。」

「君は幾十萬の資産家の息子ぢやあないか。」

「また始まつたな。」

「始まつたぢやないよ、君は偉いからな、體驗も妙なく、斯う云つちやあ感情を害するだらうが學校だつて尻尾に着いてやつとパスした位だのに……。」

「ああ、澤山々々。」

「澤山ぢやない、……だのに君は親爺の幾十萬の資産の繼承者なんだからね。その君の貧乏や不満足知れてらあ、お小遣ひが少なかつたと云ふ不満や、書齋を新築する金が足りないと云ふ貧乏くらゐ。」

「おい、もうよして呉れ、人が見てるよ。」

「もうよすよ。だが云ふがね、これは俺が君へ忠告するんだから氣にとめちやあいけないよ……俺のやうな體驗は境遇が許さんとしても、思索と見聞は充分にしるよ、そして不満や不服を減することだ。」

「ありがたう。」

「禮はいらない、だが君なんか良い星の下へ生れて來たもんだ、金はあるしさ、地位はよいまた



遊んでゐられるんだからなあ。」

「俺だつて遊んではゐない。」

「遊んでゐるも同然さ、俺を見る俺を見る、俺は毎日ああして必死に雑文を書いても食ふに困ることがあるんだぜ。」

「君は偉い。」

「偉い、茶化すな、偉くも何でもない、俺はこんな境遇に在ることを寧ろ光榮としてゐるんだ、俺は俺のやるべきことを澤山持つてゐながらそれを仕遂げ得ないのを、耻かしくさへ思つてゐるのだ。」

「よく、身體が續くね。」

「習慣のおかげだ。」

「困つたら俺の所へ來給へ、何時でも。俺は困つてゐる者を見殺しにはしないよ。俺んこの別荘も……それ鎌倉のね、あれが空いてるから、讀書をしやうと思ふなら何時でも使つて呉れ給へ。」

「いけない、いけない、それがいけないんだ。そんな物の言ひ方をする君がお坊ちやんと云はれるのだ。」

「何故？」

「解らうぢやないか、そんなことは一べん世の中を潛つて來た人間の云ふべき事だ。そんな事を世の中を知らない君の口からきくと、まったく氣障で聞かれないね。俺はもちろん依頼心が胸に宿るのを恐れるが、俺でなくとも、さう云はれて「ありがたう」とも云ふものはあるまい。此間英文で讀んだが、君のやうなのは、ブルジョアの疾病の一つで温情主義とでも云ふべきものだ。温情と云ふことは、先づ階級があつて始めて云はれる言葉であつた。君と俺の如く、學友として平等に交つてゐる間には、温情主義と云ふやうなものは生れない筈だ。」

「俺は云ひ過ぎた。」

「いやいや、俺の方が失禮した。妙な議論をしちやつたね……どうだい此處の眺めは。」

「すてきだね。」

## 淋しき友

——君はセンチメンタリズムだ——

崖の上から、夜の市街を眺める。小山のやうな建物と建物の間にも、その建物にも、チラチラ



と點火が點されて、夜の空にはあまたの星が銀の屑を撒いたやうに輝いてゐる。

崖の下にも路があつて、その兩側には丈にも餘るやうな長い雜草が茂つてゐた。

「風が涼しいね。」

と黒田が、淋しい聲で云つた。

「君は、俺の云つたことに、氣に懸けてるぢやあないか。」

黒田は慌てて、

「いや決して、俺は君の言葉からよほど考へさせられた。だが、俺は夜の市街を眺めると憂鬱になつてしやうがないのだ。」

「さうかなあ、俺の様に他國の空を眺めてゐるものが、時偶センチメンタルな物思ひをするのは自然だが、君のやうな純粹の江戸ツ子子が、そんなことでどうするのだ。」

「俺自身解らないのだ、俺は此の世の中がだんだん醜いものに見えて来る。」

「ふん。」

「その醜さを見るに耐へられないんだ。」

「もう一步を進めて見ろ。」

「もう一步進めれば死より外にならぬ。」

「弱い弱い、そんなこつちやあ駄目だぞ、死に自ら一步を進める程の勇氣がなくて、どうして世の中の價值が解るのだ。世の中の醜く見えるのは、未だ美しいものであること、言ひ換へれば眞實が解るまでの過渡期だ。もつと苦しんで見ろ、世の中の如何に有難く出来てゐるかが、掌を指すやうに解つて来る。俺は出駄羅目は言はない、俺は眞實の事を云ふ、君がもう一度踏み直して世の中を見て呉れるを待つ。」

「俺は、斯う云ふと變だが、自分で出来るだけは苦しんで見、また考へても見たのだ、しかし結局世の中が醜い墓場で、そこには死屍を食ふ鬼が住んでゐるばかりだと思つた。」

「妙に淋しいね。」

「淋しい、本當に俺は淋しくつて堪らないのだ。淋しい、淋しいと云ふことばはたまらない。」

「もいち度言つて見ろ。」

「淋し。」

「いけない、本統に哀れな聲をする。もつともつと強くなつて呉れ、そして生きるまで生き抜くんだ。必死に強く生きるんだ。も少し歩かう。」



「ああ。」

竹垣をめぐらした家々が、ポツポツと並んで、新しい路上を、街燈が淡茶けた光りに浮き出してゐた。二人の影が、前になつたり後になつたり、短く濃く、長く薄くなつたりした。空をふと眺めると、強い光りを放つて、青い流星がスツと地上に流れ落ちた。そして耳にはきこえない大きい響きが、ドシンと胸を打つた。

### 日露開戦

——元太郎の花々しき戦死——

明治三十六年、日露の風雲が益々急となつて来て、巷と云ひ村落と云ひ、此噂に持ちきるようになつた。

日露は到頭開戦して、愈々満洲の野に雌雄を決することになつた。

「到頭やりますな。」

「日本は大勝利ですよ。」

「どうして？」

「でも日本軍には何時も天佑があるから。」

「天佑なんか當にしてゐられるのですか、實力本位ですよ、今の世の戦争ではね。何しろ對手が世界の強國と云ふロシアですからね。」

「さうですか。」

「さうですとも今頃、天佑なんか當にして戦争をする様ちやあ一度でやられてしまひますよ。天佑や神助は唯士氣の阻喪を防ぐ一方便でしてね、要するに勝敗は其軍の強弱と國民の援助の有無に在るんですよ。」

「ご尤もです。」

「だから、我々非戦闘員も大いに此際我軍の應援に努まなければなりませんね、國民に熱のない戦争が、何時もその國家を敗残に終らせた例は幾何でもあります。殊にロシアの様な大敵と一騎打ちをするんですから、我々も麻胡々々しては居られませんよ。」

「ああ、號外が来ました。」

「何です、何です。」

「××師團へ今動員令が下つたと云ふのです。それから、ええと海軍の出動に就て〇〇が澤山あ



つて要領を得ません。」

「はあ、戦争號外は〇〇づくめでしてね。」

等と云ふ對話がど

こでもかしくてもさ

れるのであつた。

元太郎の出征する

日が近附いた。彼に

は悦んで國難に當る

勇氣と信念があつた

銀行とも會社とも絶

縁して、一念出征の

日の一日も半時も早

からん事を祈るの\*

がめんく」と記されてあつた「死んだか」と唯一言、悲痛な手紙の上へ投げかけたは吐息であつた



よ後最の郎太元るあ譽名

\*であつた。

征衣を着けて、明

早朝には愈々征露の

旅に上ると云ふ夜、

彼には悲しいしらせ

が届いた。黒田の死

がそれである夫人馨

子の筆蹟が泪に浸ん

だその手紙には、出

征を勵ます言葉と黒

田の死を悲しむ情と

「運命とは皮肉な悪戯だ」と、元太郎は考へて見た。「慘酷なものそれ自身が運命と云ふものだ」とも思つた。黒田の死は彼にとつて大きい前途の光明であらねばならなかつた。元太郎は馨子へ慰めの手紙を書いた。その親友へ贈つた出征記念の寫眞の臺紙へは、鮮やかな筆蹟で、「死ねばもとく生きて歸れば拾ひ物。」と書いてあつた。そして元太郎を知る者には、鬚髯として彼の人格がそこに現れてゐると、感嘆三稱させたのであつた。

「遼陽城頭夜は更けて……」の歌にある通り、遼陽の戦は實に前後を通じて稀な激戦であつた。硝煙天地を籠め、砲彈飛雨の中を、大修羅の様に馳驅してしばしば偉功を樹てた歩兵中尉向井元太郎も、遂に昨は友を悼んだ身で、自らも亦人に悼まれる光榮ある戦死者の數に入るべき身となつたのであつた。

恐らく遼陽の戦が日本國民から忘れられない中は、向井中尉の名も亦千古の戦史に燦然たる輝きを放つことであらう。

功を以て畏きあたりから、名譽ある功五級金鷲勳章及び勳六等旭日單光章を賜つたのは、その後間もなくであつた。



斯くの如き眞の平和と戦争を通じての眞率なる勇士向井元太郎は、まこと大阪府泉南郡雄志達村の出身であつたのである。

「死ねばもとく生きて歸れば拾ひ物。」

かやうなる徹底的境地に在つてこそ、戦場に出でては見事な戦ひをなし、社會に在つては美むべき尊むべき行爲をなし得るのである。繰返す、

「死ねばもとく生きて歸れば拾ひ物。」

噫、この覺悟あつてこそ……。

# 騎兵一等卒

## 春の遠足

——あどけなき兒童の會話——

若草の萌え出た、名なし小草の花を装つた春の野は、どこまでもどこまでも續いて、微かな暖い風が音も立てず静かに流れてゐた。

武藏野の春は長閑である。

二三人の教員に引率された五六十名の小學生の一隊が、入り交つて野の道を遠足してゐた。どこまで行くのか、屹度それは楽しいところへ行くのに違ひなかつた。いやすべて自然の長閑さや樂しげな小鳥の囀りや、徐やかに歩む兒童のあどけなさを眺むれば、彼等が夢の王國を見物に行く途すがらであるといつても不思議はないからである。

「あれ／＼あの紫色の、まるで紫陽の花が雨に遭つたやうな、艶々しい羽翼を持つた小鳥は何て云ふの？」



「あれかい、僕も知らないね、だけれど本統に名なんぞなくつても奇麗な小鳥だね。」

「どうしてあんなに美しいの？」

「奇麗だから美しいのさ。」

「人間なら近衛の兵隊さんだね。」

「近衛の騎兵とでも云ふところだね、勇ましくて上品でさ。」

「まったく近衛兵は好きだ。」

等と打解けて談しあつてゐるものもあつた。

そのうちにまたこんな話を初めた。

「陸軍と海軍とどつちが偉いだらう。」

「それは海軍が偉いや。」

「どうして。」

「でも日本は海國だから、海軍が弱いとすぐ亡ぼされてしまふんだもの、だから海軍が偉いよ。」

「それは違ふよ、僕は陸軍が偉いと思ふよ、陸軍の方が。」

「どうして。」

「どうしてつて、陸地を守るのは陸軍だらう、若し敵が上陸した時に陸軍がなかつたら一度に敗けてしまふ、だから陸軍は偉いと思ふよ。」

「そんな事があるものか、海軍さへ強ければ敵を一人だつて陸に揚げはしないよ。」

「そりやあ出来ない、戦争をする位の敵だから、どんな事しても上陸するだらう。」

「そんなことあるもんか。」

「何でも陸軍が偉よ。」

「ちやあ先生に聞いて見やう。」

と列外に出て来て教員を呼び止める。

「先生先生。」

「何です。」

と、お獅子のやうにむづかしい顔をした教員は立ち止まつて、二人の顔を見比べる。

「陸軍と海軍とどつちが偉いんです。」

「陸軍の方が偉いんでせう。」

と口を揃へて云へば、むづかしい顔を先生は少し笑はせて、



「妙な事を云ひ出ししましたね、陸軍も海軍もどつちも偉いんです。陸軍と海軍は車の両輪のやうなもので、どつちが一つなくなつても車は動かないのです。國家でも陸海軍が揃つて精銳でないと危いのです。だから唯陸に居るのと海を守るのとの違ひで、どつちも軍人として敬はねばなりません。」「では先生、軍人になることは國家に盡てはなりません。皆さんも軍人になつたら、其の覺悟がなくてはなりません。」



かすてんえ偉がちつとと軍海と軍陸生先

\* したり 陛下に忠義をすることになりますか。」「なりますとも。身體の丈夫な人が、のらくら遊んで居るのはよくありません。身體の良い人は軍人になつて直接國家のために忠義を盡し、人に笑はれるやうなすばらな人間になつ

「判りました。」「先生、判りました。」と異口同音に答へるのであつた。先程から黙つて聞いてゐた留吉は頓狂な聲を出して、「僕はね、近衛の騎兵になるんだ。」「良いね近衛の騎兵は。」「良いだらう、僕はどんな事があつても近衛騎兵にならなければならぬと思つてゐるよ、僕は第一に勉強する、第二に乗馬を稽古する、第三に武術を習ふ。」「騎兵になつて戦争をするの。」「戦争が始まればね、だけれど平常は陛下の御宮城を御守りすれば好いんだ。」「戦争に出たら生命がないぞ、戦争はない方がいいね。」「戦争はもう方法の無い時にする事であるから、しなくて済めばしない方がいいね、しかし愈々始まつたら、日頃練磨の腕を揮つて敵軍を散々に打ち破らなければならぬ。」「と留吉少年は既に軍人になつた意氣込で友達に物語るのであつた。」



## 肉弾で戦ふまでだ

—日本武士道の眞精神—

少年時代から軍人志願であつた矢木留吉は、十七となり十八となり十九となつた。そして留吉自身の上にもいろいろな變動があつた。二十の年、彼は志を立てて上京し、或文學博士の學僕となつて、今迄の農夫生活から一步を進めた新生面が彼の前に拓かれたのである。或る日の晴れた冬の朝であつた。友人の谷口が、博士邸に留吉を訪ねて來た。谷口は留吉とは、極く深い交際をしてゐた聞柄である。

谷口は留吉の本箱から色々の本を出して飛び読みをしてゐたが、それにも倦いたか、ボタンと閉ぢて、

「おい君、滿洲問題が愈々やかましくなつて來たぢやあないか。」

「結局戦争だね。」

「果して戦争をやるだらうか。」

「やらなくても好いが、やらねば事が落着きまいよ。」

「でもね、今の我が國情では戦争なんかやれないだらう、我が國は未だ三等國から二等國への過程にある位で、到底強敵ロシアを向ふに廻しては戦へないだらう、第一軍費が續くまい。」

「貧乏だから戦争が出来ないと云ふ理由はない。」

「それもさうだが、貧乏をやり繰りして戦争して若しも負けたらどうするつもりだらう。」

「負けたら憂ひはないよ、何故かと云へば日本人は日本國民の血が一滴になるまで國土を保つ覺悟があるからさ。」

「でも實際はさうは行きます。」

「何故？」

「何故つてね、戦争に負けて國土が危くなるまで外交上放つては置けないよ、敵が首都に大砲を打ちかけても放つて置くと云ふことは出来るものぢやないよ。」

「それは君獨特の客觀論よ、僕は主觀論者だからどうせいくら論じたつて一致はすまい。だが君ならばどうするのだ。」

「僕は實力で戦ふことを勧める。戦闘員の武勇が敵を超絶してゐることを望みたい。だから敵が



銃砲弾を亂射すれば、味方は肉弾を叩きつける、肉弾で戦ふと、云ふやうに、武器は劣つても武勇で勝てば良い。」  
「スバルタ式か。」と  
留吉。

「いや光榮ある日本武士道である。」

「僕も來年の五月は徴兵検査だが、どうかして近衛騎兵に入りたいと思つてゐる。」

「近衛騎兵とは妙なところを覗つたもの\*」

「さうだ。」



\*だね。」

「僕の幼年時代からの本願だ。」

「そりや好いだらう我々は國家と云ふも戦の中にも相互的若しでまは社會的生活を營んでゐる以上、その極めてよき組織を保護するためには、充分の努力をしなければならぬのだ。」

「僕は今年だったが、第一乙種で籤のがれになつてしまつて濟まないやうな氣がしてゐる。」  
「仕方がないさ、人間の體質が急に改造出来るものではなし。」  
「さうは云ふものの、不攝生が原因になつてゐるとしたらあまり大きな顔も出来ないと思ふ。僕が立派な藝術家でもあるのなら兎も角、雜文なんか書いてゐるんだから、兵隊さんになつた方が、よつほど國家に酬いるところありと云ふべきだらう。」  
「でも何とも云はれないさ、然し何しろ僕は近頃は特に營養に注意してゐる。來年の五月が早く來れば良いと思つてゐる。」

「君の云ふ事は氣持が良い、近頃の青年はともすると不衛生をやつて故爲と身體をこはして徴兵を忌避する奴が多いから困る。ひどい奴になると逃亡したり床下に七日も十日も潜んでゐたりするのがある」と云ふよ。」

「それは僕も知つてゐる、田舎、即ち郷里の府下南葛の事であるが、徴兵が恐ろしくて十五日も床下に隠れてゐた壯丁があつたよ、床下に藁藁を敷いてね、三度々阿母が入れてくれる握り飯を食つては寝てゐたんだ。」

「最後にはどうしたのか」と谷口。



「おしまひはね、阿母が握り飯を入れてやつてゐるのを巡查が発見して、すぐ檢舉られてしまつたのだ。今から十年も以前の事だけれど、今でも時々そんな莫迦者が出て来ると云ふのは、苦々しい話だねえ。」

「困るねえ、莫迦者には。」

「まつたく仕様がな、何だつてそんなに徴兵が恐ろしいのか氣が知れないよ。」

「恐ろしいとは行かないまでも、徴兵検査の来る頃は胸が躍るものだが、君たちはどうだい。」

「平氣だね、羞耻心が稀薄なせいかもしれない、耻かしくも何とも思はないよ。」

「さうだね。僕もさうだつた、まるご平氣だつた。」

「さうなくちや嘘だ、莫迦者の恐ろしがるのも、徴兵されることを怖がつてゐるから、恟々しなければならないのだ。」

「ああ………」

二人は暫らく黙つて窓の外の枯木の枝を眺めた。葉をすつかり振りおとした枯枝には、寒さうなマントを着けた二羽の雀が、動くのも退屈さうに、足を縮めてひよいくと少し宛飛んでゐた冬は淋しいものである。

谷口は又語り出した。

「世の中は随分でたらめに出来てゐるね。」

「今更僕の人生觀を述べるでもないが、人間は悲愴な眞剣さを有つて生きたいね、僕は往々デカダンと誤られるが、決してデカダンではない、僕には泣き笑いと云ふ深刻な境地があるのだ。」

「僕にも共鳴出来る。」

「さうか、悲愴に眞剣に完全に死にたいと思つてゐる、死ぬると云ふことは生存の結果だが、僕はさやうな死を選ぶために悲痛な生存を先づ行ふのだ。」

「泣き笑ひの境地を有つ者は淋しいね。」

「たまらなく淋しいよ。」

「それで？………」

「それで僕は夢を見る、夢に憧れる。」

「いけない、それはいけないのだ。夢を憧れる者は愚かだと僕が言つたぢやないか。」

「いやいや、夢から力と感激を興へられることが尠くないものだ。僕の友人で夢が實現して、理想通りになつた、美しいローマンスもあるのだからね。愚か者かもしれない、痴け者かもしれ



ない、けれども僕は夢に憧れ通して見せる。近衛騎兵も夢だ、しかし僕はちつとも不安を感じない、現實に夢を見るのだ。」

### 鎮守社へ日参して

——合格を祈願する留吉——

海行かば 水漬く屍 山行かば 草むす屍 大君の邊にこそ死なめ 顧りみはせじ

千數百年の昔しにうたはれたこの歌も、今尙忠君愛國の志士に愛誦されて朽ちることがないのは何の故か、それは此歌の眞精神がひたと胸に來て共鳴を呼び起すからである。

何と云ふ勇壯、何と云ふ義烈、これこそ日本武士の意氣である。大和民族の誇りである。日本國民の眞の精神は、僅かこの一首の歌に溢れる程盛られてある。我等は戰勝氣分の誇張ぶつた歌より、悲愴なこの歌を高らかにうたはうではないか。

十二月に留吉から長兄へ送つた返書の中にこのやうのがあつた。

(前略)仰せの通り、來年の春は徴兵検査を受けるのですが、恐らく不合格と云ふことは、此健康な私にはあり得ないことだと思ひます。そして私は本願通り近衛騎兵隊に入りたいと思つて

わます。

日露の風雲に就ても、未だくそれと斷定は出來ないけれども、早晚一戦しなければ收まらないでせう。その時には本統に、生甲斐のある人間として、國難に眞先駆けて赴く覺悟で居りますから御安心下さい。職業に就ても、いろ／＼考へてはゐるのですけれど、自分ほどの才能では世界的な乃至は東洋的な仕事が出来るかどうかを危ぶまずにはゐられない現狀です。そして又近來の文藝上の思潮は非常に混沌として、統一を失つたものであります故、寧ろさうした思想戰爭の一軍士で戦ふよりも、刻下の即ち國家の防禦に當る軍士となることを考へなければならぬと思ひます。理屈より理論より、先づ私たちは實際に走らなければなりません。國家の實際問題に當らなければなりません。何故かと申せば、冗言の必要はなく、唯私たちは國家に實在する社會人であるからであります。

では、すべてをよろしくねがひます。近所へもあなたを通じてよろしく。

末筆ながら、お嬢様にもよろしく、來年の五月には早々と歸村します。近いところでその日歸りも出来るのですけれど、勉強中だけは里心のつくのを恐れますから、お許しねがひます。

以上



十二月二十五日

兄 上 卓 下

留吉より

留吉はその翌年、五月の徴兵検査が来るまで、断然文筆を抛つて、身體の練磨に日も尙足らざると云ふ熱心さを示したのであつた。そして、さらでだに立派な體格が、一層練磨されたものとなり、肉瘤が兩腕はをろか全身に隆々と現れて來たのであつた。

「おや、又やつてゐるな。」

と誰もが驚くほど、彼は毎日の様に、重い檜の木刀を振つたり、十幾封度の鐵亞鈴を使つたりして運動をのみこれ事としてゐたのである。

五月が來ると、留吉は充分合格の自信を持つて南葛飾郡松江村の故家に歸つて行つた。

「兄さんありがたう。」

「うむ、よく歸つて來たなあ。」

と唯それだけ、あとは無言で嬉し涙に暮れてゐるばかり。日本に歸化し日本を最もよく知つてゐたと云はれる、世界的文豪ラフガチオヘルン氏が「日本人の愛は禮義と親切の中に在る、久しく會はなかつた親子または兄弟が久し振りに會つたときは、肩に手を當て、一言か二言を云ひ、微

笑をする位である」と云つたのは、まことによく穿つたもので、まことに日本人の感激の頂點（クライマックス）に達した時は斯うである。

留吉は、歸郷のその夜から、検査の當日まで、夜となく晝となく鎮守に日參をして、ひたすらに合格せんことを祈願したのである。近來の青年の多くが、不合格になるやうにと祈つたり、ひどいのは祈禱をしたりするのは、實に天地雲泥ほどの懸隔があるのであつた。そんな青年には留吉の熱心から流れ出た汗の一滴でも飲ましてやりたいものである。

愈々初一念を貫徹して合格した留吉は近衛騎兵隊に入營することになつて、一先づ十二月の入營までは東京で再び生活することになつた。

## 馬術練習所に通ふ

——一騎遠乗り——

「初一念」と云ふものは恐ろしいものである。初一念を貫徹しやうと覺悟する程人間は強くならなければ嘘だ。途中で幾度も方針や目的を翻すやうでは駄目である。

留吉はその「初一念」を貫いて、見事近衛騎兵として、瑞雲九重の宮城に 陛下御親兵として



入隊する光榮が来たのであつた。入營は十二月であつたが、それまで遊んでゐてもならないし、身體を損ねてもいけないので、再び東京に出るや、直ちに麴町の馬術練習所に通つて、入隊に先立ち馬術の一通りを習得することになつたのであつた。



てし頭没に習練の術馬

「君も大分變つちまつたね。」  
「久し振りで偶然會つた谷口が、留吉の乗徴兵検査だつたさうだが、どうしたね。」

「馬服を不思議さうに眺めて云つた。」  
「變つたかね。」  
「餘程變つたね、第一その乗馬服を着てゐる感じと、以前長髪にしてゐた頃の感じが全然ちがふからね。」  
「君の髪も長くなつたね。」  
「ああ餘程……君は

「見事合格したよ。」  
「さうか、歩か砲か。」  
「いや近衛騎兵だよ。」  
「ふうん、さうかい、だから君が乗馬なんか熱中してゐるんだな。なるほどく解つた。君のやうに境遇に従順であり得る人間は今世では屹度成功する。」  
「でもね、僕は自分で自分の境遇を作り出すんだから、従順も何も無いよ、やれるところまでやる迄さ。」

「それさうだ、なる程、久し振で會つていきなり一つ利巧になつた。僕たちはどうしても境遇を他動的なもの乃至は宿命である位に考へてゐたのだ。」  
「實生活で苦しんで見れば、それくらゐのことは直ぐ解決がつくよ。」  
「ああ、苦しまなければ人間も駄目だね。」  
「さうだとも。」  
「ところで君は十二月には入營するんだね。」  
「ああさうだよ。」



「滿洲問題も紛糾して来たから、ことに依つたら君も戦争に出なければならなくなるかも知れないよ、もしさうなつたら華々しい戦をして呉れ給へ、そして實地に日本精神の表現を見せて呉れ給へ。」

「もちろんその覺悟だ。日本精神。殊に日本武士道的精神が誤られつゝある今日であるから、此の様にしあはせな機會は又とないと思ふ。露西亞は決して妥協すべき國ではない。必ず一度は必死に戦つて一泡吹かせてやらねばならぬ國だ。少し圖々しくなり過ぎてゐるやうだから。」

「さうだとも、市井ではその噂でもち切りだ。自國の發展と云ふことは、一の國民性慾望から生れるものではないが、敢て悪いこととは言はないが、その爲に外國を犠牲にするのは良くないことである。自國の發展のためにどんな事をしても良いと云ふのなら、世界には國際公法も要らないし國際私法も不用である。そして法律も道徳も否定しなければならなくなる。」

「その通りだ、僕たち一軍兵が大きいことを云つたつて仕様がなすが、斯うした覺悟を國民の皆が抱いて敵に當つたら、よもや小さい日本でも彼等紅毛に負けはすまいと思ふ。」

「地上に正義と神のある限りはね。では今日はこれで失敬しよう。」  
と谷口は辭し去つた。

留口は、何時もながら谷口には好感を有つてゐた。

午後の三時間を、麴町の馬術練習所で、教官の指導の下に日課通りの練習を終つた留吉は、技術上達の故を以て特に郊外遠乗りを許されて門を出た。

鐵蹄の響きも軽ろやかに、炎暑の中に風を切つて馬を驅るのは、經驗たき人の想像も及ばぬところである。賑やかな市街を出て、此處は東中野の街道である。夏の午後の空は、青く晴れて地平線の上には雄大な奇雲が双翼を擴げたままに横たはつてゐる。烈日はさんらんとして輝き、燃えるやうな綠葉にも微かな埃がかかつて顫へてゐるのであつた。

風は絶えず波のやうに埃を吹き送つた。いや埃ばかりではない、青田にも殊にこのあたりに多い菜畑にも陸稻にも、風の波は絶えず白い腹を見せて流れて行つた。

### 近衛騎兵聯隊に入營して

——日露の風雲急を告ぐ——

留吉が入營してからの精勵と謹直は軍隊の模範となるべきものであると云ふので、度々中隊長から表彰された位で、彼は當然日露は開戦すべきものと豫期して、銃槍の術に没頭し射撃に熱中